

一 テキスト

◦ كتاب التفسير ed. Rahman Orfala 1959

◦ كتاب الطهارة ed. Khaled Cairo 1958

◦ كتاب الإشارات والتبسيطات ed. Tawday Cairo 1957

二 参考文献

◦ アリストoteles De Anima : Berlin - Becker

1831

◦ 7° D 4 1 2

Enneades ou Bièbles Paris

1924-37

◦ Zeller, E. : Philosophie der Griechen Leipzig

1879-81

◦ et. Landauer : رسالة في قوة النول 1875

◦ Badawi : الرسالة عن العرب 1949

◦ Baibagi : رسالة الفلسفة العربية 1950

序  
言

本論文は前半に於て感覚、後半に於て知性  
が、イヴニ、ニ、三、一、ナ、一に於ては如何なる構  
造をもつて、いゝか分析し、そのとらへ方がある  
か。又、イヴニ、ニ、三、一、ナ、一の感覚論及び知性  
論は、知識は如何にして可能であるかと、い  
う。ア、シ、ビ、ヤ、知性を中心とする課題に對する  
最も代表的な解答をなし、て、いゝ。従つて、

の 解 答 と 吟 味 する こと に よる こと である 。

哲 学 の 本 質 的 特 長 と する こと が 出 来 る 。

の こと である 。

ア リ ス ト テ ル ス の 哲 学 が イ ス ラ ム 教 徒 達 の

手 に と り 込 め ら れ ば 。

ア リ ス ト テ ル ス の 哲 学 が イ ス ラ ム 教 徒 達 の

手 に と り 込 め ら れ ば 。

の こと である 。

の こと である 。

アリス ト テ レ ス と 研 究 可 人 達 は *Cognitive* (フ

ア イ ラ ス ト フ ギ リ ミ ヲ 語 の *Homophony* の ア ラ

ビヤ 語 学 家 へ の 置 き 換 え ) と 呼 ば れ た 。 そ の

一 群 の 人 達 の う ち 最 も 著 名 なる の が ア ル キニ

デ イ ー ズ あり タ イ ル ス の ギ リ ミ ヲ 語 学 史 に

お け る が 如 く ア ラ ビ ヤ 語 学 史 の 勝 頭 が 論 い

る れ ば 人 道 あり 彼 の 偉 大 なる は そ の 語 学 理

論 の 独 創 性 に あり ます よ り も 甚 だ した 後 の ア ラ

ビヤ 語 学 家 の ところ へ の 道 を 指 向 した に あり ます

た と え ば 。 ニ の ア ル キニ デ イ ー ズ に あり ます

て 指 向 さ れ た 道 二

論 に 於 て 非 常 に あ り

分 析 可 二 と て あ っ た

ピ ア 哲 学 の 核 心 と 存 じ

の び 有 る 。 イ ス ラ ヴ 世

者 と い わ れ る イ ヴ

知 性 論 は 如 何 なる 構 造

ア リ ス ト テ レ ス の 靈 魂

二 有 る 知 性 の 概 念 と

。 爾 来 知 性 論 は ア ラ

鏡 々 子 役 割 と 背 離 した

界 の 最 も 偉 大 なる 哲 学

ニ 一 ナ 一 に 於 て 三 の

と み せ る て あ る か

イ  
ウ  
ニ  
ミ  
ナ  
の  
主  
要  
著  
作  
リ  
ス  
ト

(  
年  
代  
順  
)

IN BUKHARA

Majmu ( compendium ) : According to his own account, this is his first attempt at authorship, answering to the request of a

certain prosodist. At the age of 21.

al-Hasil wa al-Mahsul ( The Import and the Substance )

On jurisprudence.

IN GURGAN

al-Mukhtasar al-Awsat ( The Middle Summary )

On logic. Dictated to his pupils.

al-Qanun ( The Canon ) He began writing the first part of al-Qanun,

his chief medical work.

IN HAMADHAN

Kitab al-Shifa ( The Book of Healing ) He began to work on the physical part of the Kitab al-Shifa.

al-Qanun He finished the first book of al-Qanun.

Kitab al-Shifa He finished the whole of the natural sciences and

metaphysics, with the exception of the books on animals and plants.

He began with logic and wrote one part of it.

IN ISFAHAN

Danish-Nameeh ye Alai ( The Alai Book of Knowledge )

His first book on philosophy in the Persian language.

Kitab al-Shifa He composed the remaining parts of the Shifa.

Kitab al-Isharat wa al-Tanbihat ( The Book of Directives and Remarks )



テキスト研究

循が知性に  
ついで述べている論文は

① رسالة في قوة النفس (リサイラ・フイー・クツ)

アル・ナマス、靈魂の能力について

② كتاب النفس (キター・グ・アツ・ミフ・アー)

治療の書

③ كتاب الالها (キター・グ・ア・ニ・ナ・ニ・ヤ・ート)

解放の書

④ كتاب التفسيرات (キター・グ・アル)

イニヤライト・アル・タンビハリト

綱領、及び考察の書)

である。勿論、彼の他の作品に於てき(例

えは、  
キターヴ・アル・タダヤ

尊きの書や  
アル・サド

ル・クツリーヤ  
一般的考察)知性に関する

論述が散見されることが、それらの論旨は、右に

掲げられた四篇の作品中に含まれてあり、尋かれ

少なかれ、彼が知性についてまとまっ  
た論述

と存して、そのほかに、四篇であると、いえる

の である。但し、書簡を

十篇に存するものとあり、彼の

と、未だマニコスクリプ

とあるから、それらのク

の結果、知性論に新に存光

存論述が見出される可能性

特に書簡にあっては、それ

の性質上、パトロニの発し

で答えること、当然であって

トヒスエーデニ女王クリス

加之れば、二百五

歴大なる作品の殆ん

トの段階にあるもの

リテイカルな研究

と投げかけられるもの

もあろうのであろう。

と、は、書簡

に疑問点に、手紙

それとは、デカル

チナとの間に交わ

され、興味深い。手紙をみても分かることである。  
 ・現在のアラビヤ哲学研究に於て最も精力  
 的になされるべき仕事は、マニユスタクリプトの  
 クリテイカルな研究である。スコラ哲学の世  
 界によく知られていないヴァニ・ミナーゾス  
 に対するそのよくなる状態なのだ。ほかアラビ  
 ヤ哲学者群には、既にあっては、殆んど研究され  
 ている。いとっていい。存在させるべき第一歩は  
 マニユスタクリプトの研究なのである。エジプト  
 では、マドックリプト研究の中心として、キタ  
 ー

イ	ヲ	部	ゆ	テ	料	キ	エ	リ	グ
ウ	ヲ	分	け	キ	全	タ	テ	ポ	・
ニ	ハ	分	で	ス	書	ー	イ	ト	ア
・	ハ	は	は	ト	的	ウ	ニ	の	ン
ニ	リ	は	な	ト	大	・	ヨ	研	ニ
一	制	比	ハ	ク	著	ア	ニ	究	ヲ
ナ	限	較	の	リ	ぞ	ツ	が	が	ア
一	が	的	ぞ	テ	あ	三	次	す	一
の	あ	よ	あ	イ	っ	フ	々	す	ハ
知	る	く	る	ッ	て	ア	と	み	治
性	が	研	但	ク	・	一	と	・	療
観	現	究	し	が	ヲ	は	出	そ	の
と	在	が	知	完	の	十	版	の	書
知	ま	存	性	成	全	八	さ	ク	し
る	で	さ	を	さ	て	卷	れ	リ	の
た	の	れ	あ	れ	に	に	っ	テ	マ
め	と	て	っ	て	ゆ	及	っ	イ	ニ
に	こ	ハ	っ	ハ	た	ぶ	あ	ル	ユ
最	ろ	る	か	る	っ	百	る	・	ス
							。		ク

も有力な論文は、右に掲げた四篇存のぞである。

次に、それらを一づつ、検討してみよう。

(一)

النفس (عائلة في)

ツ  
ダ  
ル  
・  
ナ  
フ  
ス  
靈魂の能力に  
>  
" < >

此の作品は、しばしば、  
النفس (ماتج النفس) (キターイダ)

ル・ナフス  
靈魂の書  
(と呼ばれる初期作品)

群に属する。  
他の  
(2)  
(3)  
(4)  
に  
く  
る  
べ  
て  
非

常に短かく、内容的にも、これら作品と重複

12 "3。アルアアアア1ニ1教授... 1952年

にカイロで出版されたものには、これは「全体は

三章と一つのイデオロギーが、<sup>5</sup>存<sup>9</sup>て<sup>11</sup>る<sup>。</sup>

才一章では、人間靈魂の实体性について

論述がなされ

才二章では、人間靈魂の不滅性について

論述がなされ

才三章では、肉体滅後の靈魂の幸福或

いは不幸の段階づけに、<sup>12</sup>て<sup>論</sup>じ<sup>れ</sup>最後

にエピローグに於て存在の秩序に関する

議論が展開されていゝのである。これを後に

述べるキタ・グ・ア・ナ・ジヤと比較するな

らば、主として次の六章にわたる議論が、

ニ・リ・サ・ラ・イ・ク・ワ・ル・ナ・フ・ス・に

於ては見出されぬ。即ち

1. 自覚する存在としての「靈魂論」ニ関し

ス・え・方・は・キ・タ・ラ・ア・ニ・ナ・ジ・ヤ・に

於ては、靈魂論の核心となるのである

。

2. 人間靈魂の起源にわたる論述。



3

知性論に於けるさまざまの抽象作用

に関する議論

4

可能的知性 現実的知性と  
「ゆるゆる」なる

いわゆる知性の反論

5

Stoic (アクルアマリ)に関する

論述

6

予言に「て」の理論

総論

的  
「リサイラ・ブイ・クツワル」

「於ては」知性概念の分析が

「思われざる」論  
「は」ニ

の 作品の 表面上の 性格が であつて、これは かなり

いふ 事情の もとに 書かれた のか、を 知る には 限

り、は 正當に 性格が つけ、位置が つけらるゝと 出

来、存、い、Landauer は、Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen

Gesellschaft, 1875 年 (vol. 29) に 於て、これの ドイツ

語 訳を、短かに 註釈と ともに 出し、たが、その

短かに 註釈は、作品 成立の 事情に ついて、何

いふ 説明を、もたせて、は、い、存、い、  
ニ、う、い、う、  
類、い

の 作品の 紹介は、  
翻訳の あり、  
も、ち、う、ん、そ、の、  
価

値は、極めて 大きい、  
い、け、れ、ど、も、  
で、は、  
駄目、で、あ

て 完全ではな  
いのである。

存す。アル・ア  
フワリーニ教授  
の版(1952年)

に先立って、は  
1907年に Van Dyke がカイ  
ロで出し

て  
いる。

(=)

كشاف النصارى (キ  
ターグ・アツ  
ミア) (治療の書)

キターグ・アツ  
ミアは先に  
も述べた

よ  
うに  
十  
八  
巻  
に  
も  
あ  
る  
大  
著  
で  
あ  
っ  
て  
内

客も百科全書の中に尋方面にわたっていふ。循

か、い、つ、ニ、三、か、ら、此、の、作、品、の、構、想、を、立、て、て、い、ふ。

か、は、ほ、つ、き、り、い、な、い、か、い、ぐ、ん、ア、ル、キ、フ

テ、イ、の、*イグニ* (タ、リ、イ、フ、ル、フ、カ、マ、イ、ウ

賢者達物語) にあれば (1903年) の *Lippert* 版では

P. 200) イ、グ、ン、ニ、イ、ナ、イ、が、ハ、マ、ド、ハ、イ、ニ、滞

在、一、て、い、下、項、自、然、亭、に、関、す、る、部、分、が、書、き、は

じ、め、ら、れ、た、と、い、う、。、イ、グ、ン、ニ、イ、ナ、イ、が、シ

イ、ユ、か、ら、ハ、マ、ド、ハ、イ、ニ、に、料、た、の、は、A.D. 1017年

前後、循、か、約、三、十、七、ハ、オ、の、頃、で、あ、っ、た、ハ

マドハニーに移り住んでからのはその地  
方の支配者ニヤムス・アツドールの侍医と  
して気に入られその政治上の相談役にもな  
つた。ニユー・テ彼は積極的に政治に介入して  
ゆき政治上の最高補佐官の地位を得るので  
あるがそれは同時に出ては戦場にならな  
かぬ。帰ってからは政敵達との絶え間のない抗争  
に明け暮れると、いよいよ忙し日々を彼はもた  
し、た。イヴ・ニ・ミナナ自身は、まじり  
い生活と楽しんでいた。たきさか、あまか、  
（実

と	閉	ト	ヤ	ナ	え	そ	し	し	際
師	上	決	一	一	る	れ	存	さ	循
に	の	一	二	の	と	と	か	め	は
懇	仕	て	一	愛	と	憂	っ	り	は
願	事	悪	か	弟	こ	え	た	の	美
し	の	く		子	ろ	た	人	存	衣
ア	こ	ほ	そ	ア	に	。	で	り	美
リ	と	な	う	ダ	よ	イ	あ	限	食
ス	も	い	ハ	ウ	れ	ヴ	る	り	音
ト	忘	だ	ウ	バ	ば	ニ	決	者	楽
テ	れ	ろ	政	イ		ア	一	会	や
ス	存	う	治	ド	或	ル	て	酒	盆
の	い	け	に	。	る	キ	遠	り	等
註	で	ど	明	ア	時	フ	ざ	等	と
釈	続		け	ル	イ	テ	け	と	は
書	け	い	暮	ユ	ダ	イ	け	と	は
と	て	う	れ	ズ	ニ	の	け	と	は
	欲	か	る	シ	シ	伝	け	と	は
	し		る	ジ	一		か		
	い	学	生						
			活						

つ く さ れ て は ど う だ と す す め 下 。 = ね に 答 え

て 師 イ ヴ ニ . ミ ナ ナ は 公 務 で 忙 し " 羨 に

見 ま ま に 使 え る 時 間 が 自 分 に は 可 ま り 存

" け れ ど も 反 対 意 見 と 持 っ 下 人 達 と の 論 争

や 彼 等 の 質 問 に " " " " 答 え ね ば 存 在 自 分

と " " 煩 わ し さ か ら 解 放 さ れ る 存 在 自 分

に 正 し " " と 思 わ れ る 部 分 か ら と り か か っ て も

" " と 言 っ 下 と " " (  ) タ リ 一 > ル

・ フ カ マ 一 ヲ ed. Hippert, 1903, P. 20 ) = う 一 て キ

タ ー ヴ . ア ヅ ミ フ ア 一 の 自 然 論 が 書 き 始 め る

れたのであろう。しかし、ニニで注意しなけれ

ば、なすなすニニとは、キタ、イダ、アツ、ミ、フ、ア、

は、決、一、二、単、存、る、ア、リ、ス、ト、テ、レ、ス、の、註、釈、書

で、は、な、す、に、け、に、う、に、と、で、あ、る、イ、ダ、ニ、ミ、ナ

の (مسألة في النفس) (リ、サ、イ、ラ、フ、イ、ル、ナ、フ、ス

靈魂論) は、決、一、ア、リ、ス、ト、テ、レ、ス、の、De

Anima の 註、釈、書、で、は、な、す、。多、論、ア、ラ、ビ、ヤ、の、哲

学、者、達、に、と、つ、て、ア、リ、ス、ト、テ、レ、ス、は、何、よ、り、も

ま、が、循、尊、の、(أصل القول) (ア、ル、ム、ア、ツ、リ

ム、ル、ア、ウ、ル、オ、ー、の、師) で、あ、り、学、問、と



知性論

に

つ

て

明

さ

か

に

な

る

で

あ

る

う

。

開

か

見

受

け

ら

れ

る

の

で

あ

る

。

二

の

こ

と

は

後

に

は

在

り

得

存

”

”

。

循

独

自

の

着

想

と

。

理

論

的

展

か

（

ア

リ

ス

ト

テ

レ

ス

の

キ

の

で

存

”

”

よ

う

存

哲

。

即

ち

。

骨

組

は

ア

リ

ス

ト

テ

レ

ス

の

キ

の

で

あ

る

釈

書

と

一

て

の

梓

を

ほ

る

か

に

こ

え

る

キ

の

で

あ

る

ら

わ

れ

る

が

。

キ

夕

一

が

。

ア

ツ

ニ

フ

ア

一

は

。

註

ト

テ

レ

ス

の

註

釈

書

を

つ

く

る

と

”

”

形

に

於

て

あ

こ

と

で

あ

っ

た

。

従

っ

て

循

等

の

任

事

は

。

ア

リ

ス

は

。

と

り

も

存

お

さ

ず

。

ア

リ

ス

ト

テ

レ

ス

を

護

王

さて上に述べたような事情で自然な書

きはじめられたのであるが、キタリーブ・アツ

ミフアーと構成する全ての論文が、このハマ

ドハニー滞在以後に書かれたかどろかは、は

りきりと保証できなはい。だが、ハマド

ハニー滞在以前に既に書きためられていた諾

論文が、後にキタリーブ・アツミフアーの中

にくみ込まれたにせよ、その可能性は否

定出来ない。大部分の主要な論文が、この

ハマドハニー滞在以後に書かれたことは、間違

又	一	ら	の	当	イ	と	と	お	い
他	ダ	た	孝	時	ド	キ	キ	く	な
の	・	た	に	の	・	夕	夕	り	な
弟	ア	。 ……	毎	生	ア	一	一	な	が
子	ツ	……	晩	活	ル	ヴ	ヴ	か	ら
が	シ	……		と	・	・	・	ら	
	フ	……		描	ユ	い	ア	も	上
ア	ア	が	通	い	ズ	っ	ツ		の
ル	一	が	強	て	ジ	た	ニ	撃	責
・	の	支	の	い	ヤ	。 彼	フ	く	任
カ	或	全	集	る	一	の	ア	バ	者
一	る	の	い	。 人	=	愛	一	き	と
又	論	不	と	生	一	弟	エ	精	い
一	文	書		生	は	子	構	力	て
二	と	に	生	は	私	ア	成	で	多
と	読	な	生	は	達	ヴ	す		忙
料	み	っ	の	私	弟	・	る	循	生
の	上	た	実	達	子	ウ	諸	は	活
後	げ	キ	こ	弟	子	バ	論	次	と
で		夕	い	子			文	々	

読み上げた。各自に割り当てられた部分の

朗

読が終るとおはやしや跡子達が呼い入れ

れ。酒盛りを聞かして、勉強の後の時間とす

れた。……昼間はミヤマス・アツドリ

もとで忙しく政務をとるため勉強は夜行

れた。……(タリ)ア

カマノウ) ed. nippon, 1903 p. 132) またホニダミ

ルはイグニ・シーナカハマドハイニ

ミヤマス・アツドリの大臣とつとめて

ハ下時。循は毎朝、曉前に起きて、キタ

グ

コクヨ

アツニフア一ニ数頁書き下すめた。それか  
ら彼の弟子達ニ呼び入れて、彼等と共  
に彼の作品(PL)の教章節を讀んだ。それか  
すむと彼は、出勤の仕度とし、家まで出  
て来た部下達と一緒に役所に行き、昼ま  
で政務を執つた。それかす自介の家  
に帰つて、いつても大勢の客と一緒に  
昼食会をひらいた。昼寢の後、  
ニヤムス。アソドールと重要事項  
を協議しておこなつた………  
と述べている。

(  
داستور الكوراء  
ダストウ  
イルル  
ウザ  
ライ  
ウ

大臣達の仕事  
Ed. Kofie. Tokwan  
1317 A.H. = 1899 A.D. (p.87)

ニ  
の  
両  
人  
の  
記  
述  
は  
ど  
う  
か  
本  
当  
か  
は  
分  
ら  
ぬ

か  
し  
か  
し  
互  
に  
矛  
盾  
す  
る  
も  
の  
で  
は  
な  
い  
。  
ホ

ニ  
ダ  
ミ  
ー  
ル  
は  
昼  
間  
の  
イ  
ヴ  
ニ  
ミ  
ー  
ナ  
ー  
と  
描  
き

イ  
ヴ  
ニ  
ア  
ル  
キ  
フ  
テ  
イ  
は  
夜  
の  
儀  
と  
描  
いて

い  
る  
と  
も  
と  
れ  
ど  
う  
。  
俗  
世  
間  
と  
離  
れ  
て  
独  
り

孤  
高  
の  
腹  
想  
に  
耽  
つ  
て  
ア  
ル  
フ  
ア  
ラ  
ー  
ビ  
ー  
と  
は

対  
蹠  
的  
な  
イ  
ヴ  
ニ  
ミ  
ー  
ナ  
ー  
の  
姿  
と  
精  
力  
的  
に

任  
事  
と  
な  
し  
と  
げ  
て  
ゆ  
く  
儀  
の  
姿  
と  
な  
れ  
る  
の  
記

述は淺いおかしきものである。

ニヨウニシテ書き続けられたキタダ

アツニフアハ政變の代りに彼がハマドハ

リニエ離れハマドハニには四年をハシ五

年滞在してハハイスマアハニに七命し

下時には既に動物學と植物學とを除く自

然亭 (علم النبات) イルムツタビイッヤイト

シク全分野と形而上學 (علم النفس) イルム

ルイラヒツヤイト) とか良成されたり要

に論理學 (علم المنطق) イルムニテイク

しにちがつけられ  
てハタ。ハマド  
ハ一ニ時代

に於てもキター  
ヴ・アツミフア  
一のみに專

念一取わけでは  
なくそニに特  
てからの最

初の作品たる  
الادوية القلبية (アル  
・アドバイヤ

トル・カルボツヤ  
一・心臓病) エ  
はいめとし

て。كتان الحارثية (キ  
ターヴル・ヒ  
ダイヤ カハラ  
專 カハラキ

の書) كتان الفلاح (キ  
ターヴル・クラ  
ニジ カハラ  
コ

痲痛の書) 專と書  
き上げてゐる。  
此專の書の

は。恐らくニヤ  
ムス・アツド  
一の註文に

あつて書かれた  
ものであらう。  
アラバヤの



著者はよく、パトロニの注文は命令に

よって本を書いたであって、又ニの三

よすアツド、リハ、生来病弱で、

存病弱に悩まされ、悲痛で死んで、

ある。二、う、忙し、取務ある、

「まゑぬ、て書き続けられ、キタ、

ミ、ア、ハ、ニ、移って完成さ

れる、あ、イ、ア、ハ、ニ、於ては、

は、一切、政治には手を出さず、又公の取務に

も、つ、ニ、う、と、は、一、原、か、た、勿論、彼、望、み、さ

えすれは、  
欲するままの  
高は高官の  
ええられ

たであらう  
とは、  
七命のさ  
に、  
に、  
に、

し、  
盛大な儀式  
を、  
て、  
歓迎され、  
循の序

え、  
めでる  
イスラ  
ハ、  
ニ、  
の、  
支配者  
アラ、  
ア

ツ、  
ド、  
に、  
よ、  
て、  
深く、  
優遇され、  
に、  
に、  
ヒ

か、  
も、  
先考  
え、  
られ、  
の、  
で、  
ある、  
ア、  
ラ、  
ア

ツ、  
ド、  
に、  
は、  
毎週、  
金曜、  
日の、  
夕方、  
には、  
イ、  
ウ

ニ、  
ミ、  
ナ、  
に、  
臨席  
を、  
仰、  
に、  
で、  
国中、  
の、  
序者、  
が、

集まり、  
序問、  
上、  
の、  
に、  
と、  
が、  
に、  
つ、  
に、  
て、  
討論、  
する、  
よ

う、  
布告、  
を、  
発、  
し、  
た、  
り、  
に、  
て、  
に、  
る、  
。、  
ダ、  
ス

الترتيب

トウ  
イル  
ウザ  
ラ  
ウ  
P.103  
イ  
グ  
ニ  
一

ナ  
イ  
ア  
ラ  
ア  
ツ  
ド  
一  
ニ  
ハ  
深  
く  
厚  
謝

の  
意  
を  
示  
し  
ダ  
一  
ニ  
ツ  
ニ  
ユ  
ナ  
一  
ヤ  
エ  
一  
ユ

エ  
一  
ア  
ラ  
一  
イ  
ハ  
ア  
ラ  
一  
ニ  
捧  
げ  
た  
る  
知  
識  
の  
書

し  
と  
ハ  
う  
パ  
ル  
シ  
ヤ  
語  
の  
本  
を  
書  
き  
て  
お  
く  
て  
一

る  
。  
そ  
の  
序  
文  
で  
日  
頃  
の  
厚  
遇  
を  
謝  
し  
借  
り  
を  
返

す  
え  
て  
一  
二  
三  
の  
で  
あ  
る  
。

何  
故  
に  
彼  
の  
生  
活  
態  
度  
が  
変  
り  
た  
の  
か  
政  
治  
や

公  
取  
へ  
そ  
う  
ハ  
う  
生  
活  
が  
好  
ま  
き  
だ  
っ  
た  
か  
ら  
自  
発

的  
に  
手  
を  
引  
き  
下  
す  
原  
因  
、  
動  
機  
は  
何  
か  
ニ  
れ  
は  
単



体 的 な 任 上 げ に と り か か っ た イ ヴ ニ ・ ニ 一 ナ	完 成 し ・ っ "で キ タ 一 ヴ ・ ア ツ ニ フ ア 一 の 総	考 と ・ イ ス フ ア ハ 一 ニ に 移 っ て し ば "さ く し て	残 さ れ て "た キ タ 一 ヴ ・ ア ツ ニ フ ア 一 の 論 理	い ま く る の で あ る ・ ハ マ ド ハ 一 ニ 時 代 に 書 き	二 時 代 に 循 の 思 想 か 次 カ に 神 秘 的 経 向 と あ	我 々 は 持 っ て "る ・ 即 ち ・ ニ の イ ス フ ア ハ 一	ヴ ニ ・ ニ 一 ナ 一 に っ "て の 次 の よ う な 事 実 と	あ っ た か ど "う か は ・ ほ っ き り と 一 層 "か ・ イ	次 に 述 べ る こ と が 果 し て ・ そ の 変 化 の 結 果 で
--	--	---	--	--	---	--	--	---	--





ア  
1  
の  
それと  
比較  
して

1  
論理学  
自然学  
形而上学の  
三部門

に  
限定  
され  
且  
つ

2  
右  
三  
部門  
に  
於  
ける  
記述  
が  
それ  
に  
相当

する  
キ  
タ  
1  
ヴ  
ア  
ツ  
ミ  
フ  
ア  
1  
の  
記述  
と

その  
まま  
踏襲  
し  
て  
い  
る  
と  
も  
3  
が  
少  
な  
か

3  
が  
ある  
=  
と  
及  
び

3  
キ  
タ  
1  
ヴ  
ア  
ツ  
ミ  
フ  
ア  
1  
に  
於  
て  
長  
々  
と

説  
明  
さ  
れ  
て  
い  
る  
個  
所  
が  
省  
略  
さ  
れ  
た  
行  
り

に  
重  
卓  
的  
な  
説  
明  
が  
付  
き  
あ  
る  
に  
と  
り  
が



反 省 か キ 夕 1 グ ア ニ ナ シ ヤ 1 エ 書 1 1 物	述 か 実 に 存 か な か し く な る 。 ニ う 1 卓 1 の	1 グ ア ツ シ フ ア 1 ど あ っ て そ の 結 果 は 論 <sup>ろん</sup>	の 特 色 か 最 も 顕 著 に 表 わ れ て 1 る の か キ 夕	ほ ど 同 じ く な 説 明 か く り 返 さ れ る か ニ	あ る 。 し ば し ば 不 必 要 で は な 1 か と 思 わ れ る	特 色 の 一 つ は 非 常 に く り 返 し が 多 1 ニ と で	ト と 書 1 下 の か 。 イ グ ン 。 ニ 1 ナ 1 の 文 体 の	何 故 に 要 約 に キ 夕 1 グ ア ニ ナ シ ヤ 1	多 1 と 1 1 特 長 と も っ か ら で あ る 。
--	---	--	---	---	--	---	--	--	--

機  
の  
一  
つ  
ご  
は  
あ  
ま  
ま  
い  
か  
。  
ま  
し  
誰  
か  
の  
話

文  
に  
よ  
う  
な  
の  
ご  
存  
い  
と  
す  
ま  
な  
う  
ほ  
そ  
う  
考  
え

ま  
の  
か  
適  
切  
で  
あ  
ら  
う  
。  
キ  
タ  
イ  
グ  
。  
ア  
ッ  
シ  
ア

し  
と  
キ  
タ  
イ  
グ  
。  
ア  
ニ  
ナ  
ミ  
ア  
ト  
が  
完  
成  
し  
た

の  
ほ  
イ  
ス  
ア  
ア  
ハ  
一  
ニ  
に  
帰  
っ  
て  
二  
三  
年  
た  
る

下  
項  
で  
あ  
ら  
う  
。  
と  
い  
う  
の  
も  
、  
二  
の  
函  
書  
と  
書  
き

上  
げ  
た  
後  
に  
彼  
は  
上  
に  
述  
べ  
た  
パ  
ル  
ミ  
ヤ  
語  
た  
ま  
ま

論  
よ  
う  
書  
"   
て  
"   
ら  
の  
ご  
あ  
っ  
て  
そ  
か  
を  
書  
き  
始

め  
た  
の  
ほ  
特  
往  
後  
三  
年  
ほ  
か  
し  
た  
う  
な  
の  
ご

あ  
ら  
う  
。  
(  
タ  
リ  
一  
ア  
ル  
。   
ア  
カ  
マ  
一  
ウ  
P449

エ 前期 と呼 び 。ニ れ 以 後	向 エ お い て く る 。そ の 意 味	頃 か ら イ ヴ ニ シ ナ の 思 想 は 神 秘 的 傾	ナ イ メ エ ー ユ エ ー ア ラ	ー ト 。そ れ か ら ハ ル ニ ヤ 語 の ダ ー ニ ツ ニ ユ 。	ー ヴ 。ア ツ シ フ ア ー キ タ ー ヴ 。ア ニ ナ ジ ヤ	イ ス 。ア ハ ー ニ に ハ 。テ の て あ る 。サ テ キ タ	ニ に 。痲 痛 の た め に 死 ぬ ま か 。死 の 直 前 ま で	結 は 1037年A.D. = 428 A.H. に 五 十 八 才 で ハ マ ド ハ ー	イ ヴ ニ 。ニ ー ナ ー は 四 十 五 、 六 才 で あ っ た 。
---	--	--	--	--	---	--	--	--	--

であらう。勿論、彼の思想的発展がより綿密

にあらざるならば、更に細かな区介が可能であ

らうか。それは後の研究にまつて、少な

くとも、右に述べたように、ニ命し得るであ

る。

此の後期に属する代表的な作品が、例の /

頁の④の *كتاب الاشارات والتنبؤات* (キタダ・ザ・アル

イニヤライト・ワル・タニビハイト 網鏡

及び考察の書) であり、或は又 *كتاب الاشارات والتنبؤات*

(キタダ・ザ・アル・イニサイフ 公正な判断

の書しである。前期作品と後期作品とを画す  
る文体上の変化もあって後期の作品群は総  
じて流麗であり、洗練されたアラビア語で  
書かれてゐる。その変化が最もよくみえてこれ  
る作品がニのキターヴ・アル・イミヤライト  
・ワル・タニビハイトでもある。前期作品と  
代表する主要な論文がキターヴ・アツシフア  
ーであるといへば、後期作品を代表する主要  
な大著はキターヴ・アル・イミヤライト・ワ  
ル・タニビハイトであり、これが書き上げら

九  
十  
の  
は  
最  
早  
死  
に  
近  
き  
頃  
が  
あ  
た  
た。

[I] 感覚論

イヴニ・ミナーナに於ければ人間は

(アクル Intellectus 知性) の他に  $\int$  (ヒツ

ス Sensus 感覚) と有する。知性には  $\int$  感覚に

い  $\int$  ぞ  $\int$  外には  $\int$  受ける  $\int$  力  $\int$

存  $\int$  力は  $\int$  能力  $\int$  或  $\int$  は  $\int$  機能  $\int$  である。外に  $\int$  働き

かける  $\int$  能動性  $\int$  として  $\int$  ではなく  $\int$  外から  $\int$  受けと

る  $\int$  受容性  $\int$  として  $\int$  把握  $\int$  される。  $\int$  (  $\int$  キタ

1 ヴ  
ア  
ニ  
ナ  
ジ  
ヤ  
ー  
ト  
解  
放  
の  
書  
の  
才  
ニ  
章

で  
彼  
は  
視  
覚  
に  
つ  
いて  
物  
が  
見  
え  
る  
と  
い  
う  
の

は  
目  
か  
ら  
光  
か  
或  
は  
光  
の  
よ  
う  
な  
も  
の  
か  
出  
て

そ  
の  
打  
象  
物  
に  
当  
る  
か  
ら  
正  
と  
い  
う  
見  
解  
に  
対  
し

て  
視  
覚  
は  
ま  
た  
よ  
う  
に  
能  
動  
的  
な  
も  
の  
で  
は  
な  
ら  
ず

と  
な  
が  
な  
が  
と  
論  
駁  
を  
加  
え  
視  
覚  
の  
受  
容  
性  
に  
関  
し

い  
は  
受  
動  
性  
を  
強  
調  
し  
て  
い  
う  
感  
覚  
が  
こ  
の  
意  
義  
を  
持  
つ

（  
マ  
ア  
ス  
ー  
ス  
感  
覚  
に  
よ  
る  
て  
と  
ら  
え  
ら  
れ  
る  
も

の  
即  
ち  
感  
覚  
の  
対  
象  
可  
感  
的  
な  
も  
の  
の  
の

形  
相  
の  
受  
動  
的  
な  
受  
け  
入  
れ  
と  
な  
り  
可  
も  
の  
で  
あ  
る  
こ  
の



に	の	可	の	勤	の	れ	可	の	と
異		と	う	的	受	エ	知	の	と
存	両	い	）	で	動	存	的	の	知
る	者	う	。	あ	性	す	存	の	性
の	に	根	即	る	に	も	る	の	も
で	の	本	ち	か	対	の	も	之	又
あ	う	的	両	。	し	あ	の	の	。
る	て	性	者	ニ	て	る	の	れ	。
。	受	格	と	の	て	。	の	る	。
國	け	と	も	ニ	あ	。	の	も	。
覺	入	有	形	と	。	。	の	の	。
に	れ	す	相	に	。	。	の	。	。
よ	る	可	の	。	。	。	の	。	。
っ	れ	る	受	。	。	。	の	。	。
て	る	で	け	。	。	。	の	。	。
受	形	あ	入	。	。	。	の	。	。
け	相	る	れ	。	。	。	の	。	。
入	は	か	。	。	。	。	の	。	。
れ	互	。	。	。	。	。	の	。	。
ら	い	そ	。	。	。	。	の	。	。

形相の受け入れ カギール

流出 ストリール

知性

マウクイル

知性に

知性の普遍性

noethē — noemē

aisthēsiā — aisthēma  
aisthēon

感	知	>	Α30 <sup>α</sup>	ス	う	ニ	知	知	知
覚	性	ア	)	ハ	存	・	に	知	了
は	が	ク	)	ソ	ア	三	反	知	形
個	普	る	と	れ	ナ	一	一	性	相
別	遍	。	と	ヒ	口	ナ	テ	に	は
的	的	即	ニ	全	ロ	一		よ	
存	存	了	三	く	三	一	普	ッ	實
形	形	ア	が	同	カ	に	通	テ	料
相	相	リ	ニ	じ	ル	よ	的	受	に
エ	エ	ス	ニ	て	存	る	存	け	あ
受	受	ト	テ	あ	把		形	入	る
け	け	テ	次	る	え	知	相	れ	個
け	入	レ	ア	。	方	性	存	る	別
入	れ	ス	よ	(	は	と	ア	れ	的
れ	る	に	う	De Anima III, IV, 429 <sup>a</sup> , 430 <sup>a</sup>		感	テ	る	存
る	の	よ	存		ア	覚	あ	形	形
が	に	れ	問		リ	と	る	相	相
	打	は	題		ス	の	。	は	て
テ	一	は	が		ト	ニ	イ		あ
の	て		起		テ	よ	ヴ	ニ	る

個別的である所以はその形相が個別性の

原理なる質料の中にあるからである。然るに

アリストテレスは感質は質料なしに形相を

受けとる。φ περ ἀπορίας ἐστὶ τὸ δεκτικὸν τῶν ἀσχημάτων ἐλάσσονος

ἀπὸ τῶν σχημάτων (De Anima II, VII, 424<sup>a</sup>) といってゐる。

まり感質は質料の中に埋もれてゐる形相を

その質料を除いて受けとるわけであるから

もしその下とすべきならばそれによって受けと

られ下形相は、または個別の形では存しない筈であ

る。何故ならば個別性の原理なるその質料から

排 敵 で あ り 可 感 的 な ま た の 質 料 的 形 相 と	分 け の 理 論 ニ そ の ア ポ リ ヤ に 対 す る 彼 の	質 知 性 と い う 質 料 性 か ら の 抽 象 化 の 段 階	で あ る う か 。次 に 述 べ る 外 的 感 覚 内 的 感	ヴ ニ ・ ニ 一 十 一 は ど の よ う に 対 決 し て ゆ く の	ア リ ス ト テ レ ス 認 識 論 の ア ポ リ ヤ に で は イ	の 中 に あ る ニ と エ 知 る の た ら う か 。ニ う い う	の な ら ば 如 何 に し て 人 間 は そ の 形 相 が 質 料	形 相 が 質 料 な く し て 感 覚 に 受 け 入 れ ら れ る	と り の ま た か れ て い る の た ら う 。更 に 又 も し
--	--	--	--	--	---	--	---	---	--

可知的なるもの間の橋下

る断絶に橋渡しし、その間に試みをおこな

と私は考える。では先ず、外的感賞からみて

みよ。

(一) *الحواس الخارجة* (アル・ハワイス・ザ

اخرية) 外的感賞

右にみたように、知性と感賞とは、い

も形相の受容者たる根本性格を有するが、知

性の受け入れの形相が普遍

的であるのに対し

て感度の受け入れの形相

は個別的であるた

まじり知性 ( *Intellektuell* )

は可知的なる

もの ( *Objekte* ) ( *Intelligibilis* )

の対象となるに

対して感度 ( *Sinn* ) ( *Sensus* )

は可感的なるも

の ( *Sinn* ) ( *Sensitivis* ) へ対象

とするのである。

二の対象のことが知性

の感度の才の

相関点と生み出す。即ち

知性がその働き

に於て何の器官 ( *Organ* )

を用いる

の対して感度は器官

を用いる

例之は視覚は目 嗅覚は鼻 聴覚は耳と

いう器官を有してゐる。イヴニ・三一十一は

知性がその働きに於て器官を用ひてゐるとい

うことは、こゝにて様々な論証をしてゐるから結

局次の二種類の証明に集約して代表させること

が出来よう。

1. 感覚はその活動と絶え間なく繰り返してゐ

ると、次にそれにその力が弱まると、こゝで

下をその対象と見るもの状態が激し

可きるときに破壊されたり。これに反して

知性は、その活動と激しく結びつき

たに、その力が強まると弱まる。

更に又、感覚は体の成長がとまりや

て衰えてくるにつれて弱くなるが、知

性は体が衰えても弱くなるが、むしろ

体の成長がとまると、後にその本来の

強さを発揮する。これは、その知性

が器官を有して、存続と証明する

○ ( وأن الحس كونه له وجود وليس له حياة )



في لسانه

نسبته إلى الشيء الموقوله "الواحد منها نفعكماء لا كما لربها يكون واحدة جوهستاء معقلات تحبوه"

#9-13-314-1  
P. 186

أجزاء اللادله من جهه" التماس . كتابه النجات

فيخدها فتناسبا التركيب البدنيه كما من الخايه" العقل

من جهه" الغضب الكيفا لكن جميعا ثم القوى الريمير هذا آله

بعده فالفوه متخيله" وحمفا متبا سنه" أجسام أخرى الاه صا

#9-13-314-1  
P. 186

(العقل لسا . كتابه الإشارات والتبهرات

2

知

知性 知性 自己 自身 知性 知性

知性

知性

知性 知性 自己 自身 知性 知性

と 出 来 ぬ べ だ り 又 自 己 の 効 力

を 知 る べ だ り 出 来 ぬ べ だ り 更 に

自 己 の 有 る 器 官 を 知 る べ だ り 出 来 ぬ

べ だ り 何 故 存 在 せ ば 実 際 知 性

に は 知 性 と 知 性 自 身 と の 間 に 器 官 が 存

在 せ ぬ べ だ り 知 性 と 其 の 効 力 の 間 に

器 官 が 存 在 せ ぬ べ だ り 知 性 と 其 の 器

官 と の 間 に 器 官 が 存 在 せ ぬ べ だ り 。

(

ونقول بان القوة العقلية لو كانت تفعل بالآلة

السيارة، حتى يكون فعلها الخاص إما يتم

تلك الآلهة "الجسدانية" لكان يجب أن لا تعقل ذاتها وأن  
 لا تعقل الآلهة" ولا أن تعقل أنها عقلت فإنه ليس بينها  
 وبين ذاتها آلهة وليس بينها وبين الآلهة ولا بينها وبين  
 (أنها عقلت آلهة: لكنها تعقل ذاتها. كتاب الضمائم  
 #9-4: ٣٢٧-٣٢٨-١  
 P.189)

長時間にわたる物とみたり音を聴いたり

視覚や聴覚は弱まる。

視覚そのものが弱くなる。

二は五のけれどもそれれは器官の目や耳

がつかれざるのでそれより現象が生ずる。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ナ	ハ	ニ	ガ	ス	存	に	ヤ	余	あ
1		れ	そ	に	く		聴	リ	る
は	從	う	の	他		視	覚	に	。 或
緒		。	所	存	そ	覚	か	も	ハ
論	て	現	に	存	う	聴	だ	も	は
ゴ	器	象	於	い	の	覚	め	大	又
け	官	か	て	。	器	そ	に	き	
る	の	全	器	ニ	官	の	存	存	余
の	存	く	官	れ	下	た	る	音	リ
で	在	み	を	う	る	る	。	と	に
あ	1	う	用	の	月	が	ニ	聴	も
る	存	れ	ハ	ニ	や	ニ	れ	。	教
。	ハ	存	ハ	と	耳	わ	も	。	レ
総	ヒ	ハ	カ	ハ	ガ	れ	先	。	ハ
い	イ	知	う	全	ニ	る	に	。	光
て	ヴ	性	で	て	乃	カ	座	。	と
知	ニ	に	あ		れ	う	ハ	。	視
性	。	あ	っ	感	る	で	ハ	。	た
は	三	。	て	覚	カ	ハ	う	。	り
								視	
								覚	

Intellectus unabhängig  
von Körper

肉 体 の 弱 ま り と と も に 弱 く 存 っ て ゆ く か	力 き 出 す 肉 体 と い う 器 官 に 対 し て 感 覚 は	か て 肉 体 は 衰 え は じ め る か 逆 に 知 性 は 強 く	の 部 分 で 肉 体 の 成 長 が 頂 点 に 達 す る と や	述 べ る 時 に 彼 が よ く 持 出 す の か ら 後 半	い う の か 彼 の 基 本 的 存 見 解 で あ る か ら そ れ を	で は あ る か 肉 体 と は 独 立 し て あ る と	な る し め る こ と に よ っ て 知 性 を 助 け る の か	（ ） 多 論 肉 体 は 外 的 感 覚 及 心 内 的 感 覚 を 可 能	そ の 本 来 の 力 き に 於 て 肉 体 に 全 く 依 存 せ ず
--	--	---	--	---	--	--	---	--	---

と	の	の	ヴ	と	肉	魂	え	強	肉
も	機	端	ニ	ハ	体	は	る	ま	体
に	能	緒	・	ハ	の	肉	し	る	の
無	ご	と	ニ	ハ	減	体	で	と	弱
力	あ	存	一	方	亡	と	あ	ハ	ま
と	り	る	ナ	は	(	は	る	ハ	り
存	な	も	一	・	死	独	。	ハ	に
ま	る	の	に	必	)	立	ニ	ハ	も
が	ほ	で	よ	然	と	一	ハ	ハ	拘
・	ど	あ	っ	性	同	下	ハ	ハ	る
な	感	る	て	と	時	の	ハ	基	す
不	覚	。	一	も	に	で	本	本	知
霊	は	感	リ	も	靈	あ	的	的	性
魂	肉	覚	ぞ	も	魂	り	存	存	の
に	体	も	ハ	も	も	・	見	見	力
は	の	知	ハ	も	又	三	解	解	は
知	減	性	ハ	も	減	一	は	は	五
性	亡	も	ハ	も	亡	ナ	ハ	ハ	一
か	と	靈	ハ	も	可	一	ハ	ハ	三
あ		魂	ハ	も	る	ハ	ハ	ハ	
			ハ	も		ハ	ハ	ハ	

認知の正性の不同は、  
paradox 不協和は known

9

性	と	。	△	と	る	死	で	と
の	1	11	知	11	の	と	あ	と
Self	と	わ	性	3	2	は	は	。
interactin	前提	ゆ	は	=	。	籍	は	。
の	た	る	自己	と	の	が	て	。
問題	れ	知	自身	の	論	か	み	。
は	ね	性	を	証	証	と	れ	。
当	ば	の	知	明	が	か	は	。
該	な	Self	る	と	知	ず	肉	。
の	ら	interactin	る	1	性	。	体	。
	な	が	。	て	の	。	の	。
	11	受	。	受	器	。	死	。
	。	さ	。	当	官	。	が	。
	。	。	。	す	。	。	必	。
	。	。	。	る	。	。	然	。
	。	。	。	。	。	。	。	。

註	1	。	。	。	。	。	。	。
明	て	。	。	。	。	。	。	。
か	二	。	。	。	。	。	。	。
る	の	。	。	。	。	。	。	。
離	知	。	。	。	。	。	。	。

知性	こ	る	て	る	ニ	れ	る	ニ	レ	れ
は	と	存	2	ニ	一	は	ニ	ニ	・	て
器	が	す	は	と	十	後	と	ト	三	そ
官	出	は	は	と	一	に	が	ナ	一	れ
を	来	知	も	認	が	論	す	十	の	自
用	な	性	し	懐	知	ず	る	一	の	体
“	“	は	知	一	性	る	ト	て	知	と
な	“	自	性	て	の	ニ	ト	重	性	ト
“	う	ら	が	お	Segn	ト	ト	要	論	ト
と	背	と	器	く	interactiv	ト	ト	存	り	ト
結	理	知	官	た	と	一	の	の	本	て
論	が	る	を	け	前提	て	で	あ	質	充
づ	導	(	用	で	と	今	あ	る	的	分
け	か	い	“	充	と	は	る	。)	的	に
る	れ	ア	”	分	一	イ	。)	し	構	興
わ	る	カ	”	で	て	ヴ	し	か	造	味
け	か	ラ	”	あ	あ	ニ	し	か	に	あ
で	ら	Intelligence)	”	る	る	・	し	か	か	る
あ			”	。)	”		そ	わ	わ	イ
			”	オ	”					ヴ





出 来 不 可 得 何 故 不 可 得 其 際 感 覚  
 う 更 に 自 己 の 有 可 得 器 官 と 感 覚 す る に 可 得 可 得  
 自 己 の 功 能 と 感 覚 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得  
 自 身 と 感 覚 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得  
 す れ ば ( 二 の 仮 定 は 眞 である ) 感 覚 は 自 己  
 結 論 が 導 け る 。 2 の 表 現 と 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得  
 も し 感 覚 が 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得  
 感 覚 可 得 ( 心 身 的 感 覚 ) 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得  
 に 於 て 器 官 と 用 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得  
 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得 可 得

には 感覚と 感覚 自身との 間に 器官が ないから

である。 感覚と その 働き の 間に 器官が ないから

である。 感覚と その 器官 と の 間に 器官が ない

からである。 と いう 事 に なる。 それで 二れ

は アリ スト テレ ス の 所説 と は 異なる こと に

なる の である。 アリ スト テレ ス に よる 場合は 感

覚 は その 器官 と 感覚 する = と は 出来 ない こと が

自身 及び その 働き と 感覚 する の である。

(ἐκεῖ δὲ αἰσθητὰ διὰ τὴν αἰσθητικὴν ἀνάγκην οὐκ ἔστιν αἰσθητὰ

διὰ τὴν αἰσθητικὴν ἀνάγκην, καὶ διὰ τὴν αἰσθητικὴν ἀνάγκην οὐκ ἔστιν αἰσθητὰ διὰ τὴν αἰσθητικὴν ἀνάγκην.)

ἐνός τινος καὶ ἄλλου καὶ τῶν ἄλλων ἀποκρίσιν. οὐ γὰρ ἔστιν  
ἡ διανοησις καθ' αὐτὰ ἢ τὴν οὐπερεκτόν τούτων. De Anima II, T.

417a. ἔπειτα διακρίνειται ὅτι ὁρᾷ καὶ ἀκούσκει,

ἀνάγκη ἢ τῆς ὄψεως ἀναδιδένθαι ὅτι ὁρᾷ, ἢ ἔτέρῳ. ἀλλὰ ἢ  
αὐτῆς ἔσται τῆς ὄψεως καὶ τῶν ἰσοκρινέων κινήματός. ὡστε

ἢ ὅσα τῶν αὐτῶν ἔσονται ἢ αὐτῆς αὐτῆς. ἔτι δ' εἰ καὶ

ἔτέρῳ εἰς ἢ τῆς ὄψεως ἀνοησις, ἢ εἰς ἀπειρον εἶναι ἢ

αὐτῆς αὐτῆς. ἔτι δ' εἰ καὶ ἔτέρῳ εἰς ἢ τῆς ὄψεως

ἀνοησις, ἢ εἰς ἀπειρον εἶναι ἢ αὐτῆς τῆς ἔσται αὐτῆς.

ὡς ἐπὶ τῆς πρώτης τούτου ποιητέον. De Anima III, II 425<sup>b</sup>)

ニ  
う  
ハ  
リ  
ス  
ト  
テ  
レ  
ス  
ト  
イ  
ダ  
ニ  
三  
一  
ナ

との両者の見解の相違は自己感  
存ハシ自

己認識或ハ又自覚トハ問題の  
史的發

展トハ興味深ク論題を呈提  
供するものである

即チニ問題とめぐってアリ  
ストテレ

ス  
ハ  
イ  
ダ  
ニ  
三  
一  
ナ  
ハ  
ニ  
下  
る  
ま  
で  
如  
何

なる史的展開がみられるか  
トハうまのぞあ

るかニハ非常に大きな論  
題であるがし

かし先に述べたいダ  
ニ三一ナ一の  
Seg

intellectually  
なる概念と分析する  
ためにも一応は

ふれぬば存す可  
従って出来る  
下々の解明に

後に *Self-illustration* の問題と  
ともに試みたりと

思う。今ニニでとりあげたり  
ありすと

テレスの所説の前半の  
感賞はその器官と感

賞しなるといふこと  
である。これはイヴン

・三十一十一の結論と  
同じである。その論証

に於て両者には大きな  
差がある。そのイヴ

ニニ十一十一の論証  
とみたり。ニニでアリス

トテレスのそれと  
みよ。アリすとテレ

スハ  
感賞がその器官と感賞  
に在りては

たかも燃料がそれのみで燃えることは出来

ずそれか燃えろためのにはそれが火をつける

とこの他の火を必要とすることは器官も

又それ自身のみで働くことは出来ずそれ

か働くためのには感覚の対象となるものが器

官に実際に働きかけねばならない即ち器官

は感覚の対象が現実<sup>ελεγχος</sup>に働きかけるまじは可

能に於ては存在<sup>συναίμα</sup>する。故に感覚の器官と

感覚する。とある。(organ out of)

To gindgnkar auk entil eilepdaig, jinná sunajuel moier. Sio

καθάρει τὸ κρανίον οὐ καίεται αὐτὸ καθ' αὐτὸ ἀνευ τοῦ κρανίου  
 καὶ ἐκατε παρ' αὐτῶ, καὶ οὐδὲν εἶρητο τοῦ εἰρησχησῆαι πρὸς  
 αὐτὸς. De Anima II, T. 477<sup>a</sup>)

レヌの論証には一々の難点があるように思

われるといふもアリストテレスにそれ

“*organs*”  
 “*εἰρησχησῆαι*”

は可能態に於てある器官を現実態にするの

は現実態に於てある感覚対象であるか、さて

この感覚対象が現実態になるのは、*αὐτὸ* 感覚

作用と通してのみなのである。感覚作用以

前に於ては、それは可能態に於てあるものであ

対象の emergence  
 長束の  
 の内 emergence の 2 つの 2 つ  
 相互影響 相互作用の 2 つの 2 つ

難	さ	存	態	そ	賞	現	あ	じ	ま
点	で	ら	に	一	対	実	る	め	。
を	あ	な	存	て	象	態	感	て	言
ナ	る	い	る	ニ	が	に	覚	感	“
け	。	と	た	の	現	存	対	宣	換
下	イ	い	め	可	実	る	象	作	え
の	ヴ	う	に	能	態	た	が	用	れ
か	ニ	循環	ほ	態	に	め	現	が	ば
と	・	論	器	に	な	に	実	生	。
う	三	法	官	於	る	は	態	じ	器
か	一	に	が	て	な	。	に	。	官
は	ナ	あ	現	あ	な	可	存	そ	が
介	一	あ	実	る	る	能	る	一	現
さ	か	う	態	感	ぬ	に	の	て	実
な	賞	“	に	覚	ぬ	於	の	可	態
“	識	”	な	対	の	於	が	能	に
か	的	て	る	象	で	て	。	態	存
。	に	“	う	が	あ	あ	。	に	”
と	ニ	る	な	現	る	る	器	於	て
キ	の	か	な	実	。	感	官	て	は
			ほ				が	て	

15



かく  
まう  
う  
難  
卓  
か  
さ  
け  
か  
に  
く  
思  
わ  
れ  
る

アリ  
ス  
ト  
テ  
ト  
ス  
ト  
同  
じ  
型  
の  
論  
証  
と  
は  
す  
べ  
く  
そ

ハ  
と  
は  
全  
く  
異  
な  
る  
形  
の  
明  
快  
な  
論  
証  
と  
な  
ら  
ず  
て

は  
る  
に  
は  
注  
目  
に  
値  
を  
す  
べ  
く  
あ  
ら  
う

さ  
て  
以  
上  
に  
於  
て  
は  
感  
覚  
と  
知  
性  
と  
の  
本

二  
の  
相  
異  
点  
が  
感  
覚  
の  
力  
の  
欠  
き  
に  
於  
て  
器  
官  
と

用  
に  
あ  
る  
の  
に  
対  
し  
て  
知  
性  
の  
器  
官  
と  
用  
に  
あ  
る  
の  
に

と  
あ  
る  
の  
に  
は  
指  
摘  
し  
て  
お  
か  
し  
ま  
す  
に  
対  
し  
て  
イ  
グ  
に

ニ  
一  
ナ  
の  
二  
種  
類  
の  
証  
明  
と  
な  
ら  
ず  
に  
そ  
し

て  
カ  
一  
の  
証  
明  
と  
り  
靈  
魂  
の  
不  
滅  
性  
に  
関  
す  
る  
イ

証明と  
は  
不  
同  
な  
も  
と  
で  
あ  
る

ヴニ・三一十一の基本的見解を抽出し、オニ

の証明に、彼の知性の構造論にかかちる重要

概念に、*Self-intellection*の問題が含まれてい

ニと、要には、この証明から推論される自己

感覚にかんする論証に於て、イヴニ・三一十一

の「アリス」ト「テ」スとの根本的な対立を示す

と、その「対立」の「アリス」ト「テ

ト」スから「イヴニ」・「三一十一」に「自己認

識」なる「概念」の「取扱」の「変遷」と「興味」ある「問題

を「呈示」する「こと」と「その」感覚は「その」器官

と感 覚 し 存 い と い う こ と に 関 する ア リ ス ト テ

レ ス の 論 証 は 循 環 論 法 だ ら ぬ と 示 して き

た。

さて 人 間 靈 魂 は 様 々 な 力 き を も つ。 そ の

力 き に 於 て 器 官 を 要 する 力 き と 要 し 存 い

力 き と が あ る。 前 者 が 感 覚 だ ら ぬ 後 者 が 知

性 だ ら ぬ。 感 覚 は 様 々 な 器 官 を 持 つ。 そ の 力 は

感 覚 対 象 が 様 々 だ ら ぬ か ら だ ら ぬ。 何 故 に 感

覚 対 象 は 様 々 だ ら ぬ か。 そ の 力 は 感 覚 の 対 象

が 全 て 質 料 性 を 持 つ て い る か。 そ の 力 は 他 の よう な

(イヴニニニナ一にありても、  
論資料は

多様性の原理である。)  
感覚は必然的に  
實

料的存在にかかわるものである。  
(これに反し

て知性は非資料的存在にかかわる。  
さてイ

ヴニニナ一は、その様々な対象に  
応じて

感覚を区別するが、  
その外的感覚と内的感

覚に分ける。

オ: *qualitative*  
外的感覚は次の五個を  
入れ、  
個々の感覚に分

かれる。  
(  
キタウキヤチキョト  
オ: *qualitative*  
解放の書  
中六部  
オ: *qualitative*  
章

オニ章の前羊がニの  
外的感覚  
後羊が  
/ 頁

に述べたように時に視覚の受動性に  
ついて

論述にあてられ  
る。即ち

### 外的感覺

1 視覚 ( Vision )  
アインザウル  
بصر

2 聴覚 ( Audition )  
アインサウク  
سماع

3 嗅覚 ( Olfaction )  
アインハイツ  
بشم

4 味覚 ( Gustation )  
アインサウク  
ذوق

5 触覚 ( Tactility )  
アインタクト  
لمس

イ  
ヴ  
ニ  
ミ  
ナ  
ハ  
5  
触覚に  
つ  
いて

ニ  
ハ  
物  
が  
熱  
か  
そ  
や  
と  
も  
冷  
下  
か  
乾  
か  
る

て 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

個 の 機能 を 持つ か もし 二 の 四 機能 を 独立 し

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。

か 五 個 と あり 九 が 最終 的に 決 め て 二 存 二 。



官は皮膚と肉とであまがアリストテレスに

よければそれらは車に媒介体にすぎない。

右の卓と除にてイグニ・ミナーナとアリ

ストテレスとの間には大きな相異がある。

よに思われ。イグニ・ミナーナが弓くの真

とナに反複覚の受動性にあっててもアリスト

テレスも又複覚の働きに於て岩が目かこ

出たにるの反とにう誌(プラトニの誌)とし

リぞけてる(De Anima 425a)のてあり

その他の聴覚・嗅覚・味覚にあってても両者の



間には差違が存し、よゝに思われ。例えは聴

覚に關してはイヴニ・ミナナハはそれれに

は空気が関連してあり人間の耳の中にモ空

気が入つてゐて外に空気が自己のふるえと

同じ ( ロイヤル・ナジニエ *Amor Sine* ) ふるえと耳の中、空気につた

えかくして外なる音と全く同じ音が耳の中

に出来ることにあつてなると述べてゐる

か ( ロイヤル・ナジニエ *Amor Sine* ) には全くアリストテ

スのオグロ ( *De Anima II, IV, 420a* )

諸感覚のチカニズムに關する

限リ イヴニニニナトアリストテリスに

は相異尖が殆んどみあはさな<sup>い</sup>。たか<sup>く</sup>感<sup>覚</sup>と

い<sup>く</sup>概<sup>念</sup> 感<sup>覚</sup>を<sup>の</sup>た<sup>に</sup>対<sup>す</sup>る<sup>観</sup>方<sup>に</sup>は

根<sup>底</sup>的<sup>な</sup>相<sup>異</sup>か<sup>あ</sup>る<sup>の</sup>で<sup>あ</sup>る。即<sup>ち</sup>ア<sup>リ</sup>ス

トテリスか<sup>く</sup>。感<sup>覚</sup>は<sup>可</sup>感<sup>的</sup>な<sup>もの</sup>の<sup>一</sup>感<sup>覚</sup>対

象<sup>の</sup>形<sup>相</sup>（それ<sup>は</sup>個<sup>別</sup>的<sup>形</sup>相<sup>）</sup>を<sup>一</sup>感<sup>覚</sup>

料<sup>を</sup>雜<sup>か</sup>て<sup>受</sup>け<sup>入</sup>れ<sup>る</sup>こと<sup>に</sup>對<sup>し</sup>

て イヴニニニナトは<sup>一</sup>質<sup>料</sup>を<sup>も</sup>に<sup>受</sup>け

入<sup>れ</sup>る<sup>の</sup>と<sup>み</sup>る<sup>の</sup>と<sup>は</sup>（De Anima II, 424a）<sup>の</sup>質<sup>料</sup>

αισθησις εν τω δεξιω τω αισθητικω εναντι αυτου τινος οπως.

كتاب الاشارات والتنبيهات

新編

卷之七 書

P. 128

تقبل التواضع صورات المحرمات الجزئية مع التبولغ ومشكلة

我々 は 下 二 に 三 四 五 ア リ ス ト テ ー ン の 意

實 観 は 一 二 の ア ポ リ ヤ 三 四 五 合 ぶ ニ 七 八 九 十 一 二

二 の ア ポ リ ヤ 三 四 五 取 除 く 六 の 七 に イ ヴ ニ シ 一 十

一 は 支 ず 感 實 は 三 の 対 象 の 個 別 的 形 相 三

實 料 と と キ に 受 け 入 れ る と 主 張 す る の 二 三 四 五

三 四 實 料 を 六 七 八 九 十 受 け 入 れ る と す る の 三 四 五 六

四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

は  
な  
く  
て  
＝  
れ  
と  
＝  
れ  
個  
物  
(  
＝  
れ  
＝  
そ  
そ  
一

て  
＝  
れ  
の  
み  
か  
感  
覚  
の  
対  
象  
で  
あ  
る  
の  
形  
相  
が

る  
＝  
と  
が  
ど  
う  
し  
て  
分  
る  
に  
よ  
る  
か  
感  
覚  
作  
用  
が

な  
り  
た  
た  
な  
＝  
で  
は  
な  
＝  
か  
何  
故  
な  
る  
個  
物  
と  
感

知  
す  
る  
＝  
と  
が  
出  
来  
な  
＝  
か  
ら  
で  
あ  
る  
。  
そ  
も  
そ  
も

個  
物  
の  
感  
知  
が  
可  
能  
で  
あ  
る  
た  
め  
に  
は  
受  
け  
と  
る

れ  
た  
形  
相  
が  
個  
物  
の  
個  
物  
た  
る  
所  
以  
で  
あ  
る  
質  
料

性  
と  
帯  
び  
な  
け  
れ  
は  
な  
ら  
な  
い  
の  
で  
あ  
る  
。  
循

か  
の  
形  
相  
の  
形  
相  
個  
別  
的  
形  
相  
と  
＝  
う  
場  
合  
後  
者

の  
形  
相  
は  
右  
の  
よ  
う  
な  
性  
格  
を  
も  
つ  
た  
も  
の  
な  
ら  
な  
い  
で

要	的	あ	あ	一	の	物	対	の	あ
存	ぞ	る	る	つ	で	の	象	あ	り
る		。	の	こ	あ	個	で	り	
所	両	）	も	は	る	物	あ	の	感
以	者	二		存	。	に	る	ま	覚
の	は	九	三	く	あ	る	個	ま	器
た	大	に	九	五	る	所	物	の	官
の	”	対	が	個	感	以	の	給	と
は	に	一	質	又	覚	の	又	受	通
後	要	で	料	は	対	一	に	に	一
に	存		性	八	象	ラ	他	て	て

詳	る	普	と	個	の	性	で	存	得
し	が	隨	帶	（	個	と	あ	ら	る
く		的	い	感	別	帯	る	す	れ
論	三	形	て	覚	的	い	た		に
が	八	相	”	器	形	て	め	三	
る	根	は	三	官	相	”	に	九	感
）	本	非	か	の	か	る	は	が	覚
	的	質	さ	数	に	答		三	対
	に	料	で	）	に	存	個	の	象

さて以上 感覚器官の働き

では イグニ・ニ・三・一・ナ・一・は 余

テ・レ・ス・エ 踏襲して 二・三・二・と

用 への 関係は 両面

含 意 的 示 意 的

ヴニ・ニ・一・ナ・一・の 外的 感覚に

アリス ト・レ・ス・の 見解に 含ま

取 りの 一 段 階 的 な 努 力

で ある。 我々 は 次 に 二 段 階 的

感 覚 に 関 する 研 究 を 進 行 せ せ ぬ

ニ・ズ・ム・と・二・う・矣

面的 に アリス ト

が し か し 感 覚 作

人 間 に は 根 底 的

。 二 の よ う な イ

関 する 見 解 は

れ る ア ン ン ヤ エ

一 段 階 的 な

二 段 階 的 内 的

う。

(=)

التجربة الذاتية

(

أول

ها

ول

با

ا

テイナ内的感覺)

イヴニニ一十にとて

知識は先ず

普遍的 ユニバーサル

であらねばならなかつた。それ

は質料性か完全に脱却して普遍的形相であ

التجربة الذاتية

らねばならなかつた。従つて外的感覺が作

用するといふに知識を得るとい

うにたとへばならなかつた。何故なら

レ	の	す	か	料	一	姿	直	料	外
ニ	み	か	わ	的	瞬	に	器	性	的
マ	受	か	り	印	ニ	す	官	と	感
に	け	か	の	象	と	ぎ	に	併	覚
に	入	る	存	に	に	存	よ	存	に
止	れ	蓄	い	す	う	い	っ	っ	よ
了	ら	通	非	ぎ	っ	か	て	て	っ
至	れ	的	質	存	リ	さ	あ	て	て
、	る	形	料	い	か	で	り	受	け
凡	る	相	的	。	わ	あ	の	け	入
わ	あ	は	的	知	け	る	ま	れ	れ
け	で	こ	普	識	で	と	ま	ら	る
で	あ	こ	通	の	あ	。	ま	る	形
あ	る	り	性	時	る	時	に	る	相
る	。	知	と	の	と	の	孕	る	は
が	こ	性	キ	流	い	流	し	る	。
、	う	に	正	れ	う	れ	と	る	各
ナ	い	は	則	と	う	に	ら	れ	々
テ	う	は	法	ほ	い	従	れ	て	の
ニ	テ	っ	存	は	う	っ	て	絵	感
の	イ	て	ら	か	質	て	絵	應	覚



に	は	越	も	質	か	懐	か	て	場
下	力	論	そ	料	う	疑	う	あ	合
つ	一	の	れ	的	い	論	い	さ	い
の	の	立	か	世	て	の	て	う	取
か	立	場	か	界	人	立	人	先	り
	場	で	出	々	間	場	間	づ	得
と	に	あ	来	は	の		は	先	る
二	下	る	な	関	知	才	一	才	能
者	つ	。	い	係	識	=	切	一	度
扱	の	イ	と	か	は	は	知	に	か
一	か	グ	あ	な	一		識		可
的	そ	ニ	る	い	切	そ	と	そ	能
に	れ	・	知	い		う	も	う	性
問	と	三	識	い	=	い	了	い	と
う	も	い	に	関	の	う	得	う	い
な	才	ナ	関	係	経	事	な	事	て
う	=	い	関	づ	験	情	い	情	=
は	の	の	する	け	世	で	と	で	と
	立	態	る	う	界	あ	可	あ	あ
疑	場	度	超	う		る	る	る	る



3  
f  
9  
2  
は  
な  
く  
:  
:  
:  
:  
:  
:  
ま  
し  
3  
か  
え  
て  
他  
の  
知

識  
の  
前  
提  
と  
な  
る  
:  
:  
:  
:  
:  
:  
存  
不  
二  
の  
感  
覚  
に  
対  
す

3  
反  
“  
直  
接  
的  
知  
識  
に  
つ  
“  
て  
は  
後  
に  
イ  
ダ  
ニ  
三

1  
ナ  
1  
の  
知  
性  
の  
構  
造  
の  
と  
二  
3  
で  
詳  
し  
く  
論  
ず  
る

キ  
ア  
ン  
ト  
ン  
ニ  
出  
て  
く  
る  
例  
の  
有  
名  
な  
虚  
空  
の  
中

9  
人  
間  
の  
ま  
り  
虚  
空  
の  
中  
に  
完  
全  
な  
成  
人  
と  
し  
て

生  
み  
出  
さ  
れ  
漂  
う  
て  
い  
る  
人  
間  
を  
想  
像  
し  
て  
み  
る  
と

こ  
の  
人  
は  
虚  
空  
の  
中  
に  
は  
感  
覚  
作  
用  
の  
生  
い  
な

“  
か  
ら  
外  
の  
世  
界  
に  
つ  
“  
て  
は  
何  
も  
し  
つ  
て  
は  
“  
な

“  
下  
る  
よ  
う  
な  
又  
二  
の  
人  
の  
手  
足  
が  
互  
に  
触  
れ  
あ

か か る 直 接 的 の 知 識 の 可 能 性 を 主	し て 持 出 し た ま の ご あ る し	の 場 合 は 自 覚 と し て し は し る こ と を	覺 に た ま る 存 在 "直 接 的 知 識 を 有 し て	は 人 間 が 質 料 的 世 界 と は 全 く 独 立	き り と 知 つ て "ま ご あ る う と "し る	か し か し 自 己 が 存 在 し て "し る こ と	体 の 存 在 さ え も 認 め ま ら な い し な い	ま と 想 像 し て み る こ と に 人 は 手 つ く	力 可 に し か 出 来 な い ほ ど バ ラ ン ク に
張 り を 主		言 お う と	"ま ご あ る こ と	し た 感	思 考 実 験	ほ ほ つ	ま ご あ る う	と 自 分 の	離 れ て "

グニ  
ニ  
ナ  
ハ  
後  
て  
基本  
的  
に  
は  
才  
ニ  
の

立場  
に  
立  
つ  
た  
れ  
ど  
も  
質  
料  
的  
世  
界  
に  
つ  
い  
て  
も

存  
ぶ  
人  
間  
は  
知  
識  
を  
も  
つ  
得  
る  
と  
可  
る  
矣  
ぞ  
車

なる  
超  
越  
論  
者  
ぞ  
は  
な  
い  
の  
ぞ  
あ  
る  
ぞ  
一  
て  
ニ  
の

時  
の  
質  
料  
的  
世  
界  
に  
関  
可  
る  
知  
識  
と  
右  
に  
述

べ  
た  
の  
直  
接  
的  
な  
知  
識  
と  
は  
一  
体  
ど  
の  
よ  
う  
な

関  
係  
が  
あ  
る  
の  
か  
と  
い  
う  
興  
味  
深  
い  
問  
題  
が  
出  
て  
く

ま  
か  
ニ  
れ  
ば  
後  
に  
介  
折  
論  
述  
す  
る  
に  
は  
可  
る  
。

ナ  
マ  
質  
料  
的  
世  
界  
に  
つ  
い  
て  
知  
識  
を  
も  
つ  
得  
る

と  
可  
る  
イ  
グ  
ニ  
ニ  
ナ  
ナ  
ハ  
質  
料  
界  
に  
か  
か  
わ

除	ニ	そ	。	質	於	と	、	個	る
か	・	ん	=	料	け	如	普	別	と
れ	三	下	。	性	る	何	通	的	と
て	一	ハ	質	と	難	に	的	形	ニ
ゆ	十	は	料	伴	点	処	相	相	の
く	一	解	性	っ	下	理	一	一	の
か	は	決	か	て	る	可	か	得	感
そ	。	ナ	取	ハ	所	る	で	る	覚
示	如	れ	除	ハ	以	の	あ	れ	に
そ	何	る	か	ハ	の	て	う	ハ	よ
う	に	の	れ	ハ	も	あ	は	は	っ
と	一	で	サ	ハ	の	コ	は	は	て
可	ア	あ	え	ハ	は	ウ	。	知	は
る	ニ	ま	可	ハ	。	カ	。	識	質
。	の	ま	れ	ハ	個	ニ	。	ハ	料
人	質	。	ハ	ハ	別	。	ニ	。	性
間	料	。	ハ	ハ	的	。	。	。	と
靈	性	。	ハ	ハ	形	。	。	。	伴
魂	か	。	ハ	ハ	相	。	。	。	っ
が	取	。	ハ	ハ	か	。	。	。	。

外的感覺にふつと得たとは、その質料性<sup>第一性</sup>と

この個別の形相かゝる質料性<sup>第二性</sup>と

靈魂自身にあり、その機能<sup>第一性</sup>と

三、この内的感覺と叫ぶは、その機能<sup>第二性</sup>と

四、この内的感覺は、その機能<sup>第一性</sup>と

五、この感覺は、その機能<sup>第二性</sup>と

六、この感覺は、その機能<sup>第一性</sup>と

七、この感覺は、その機能<sup>第二性</sup>と

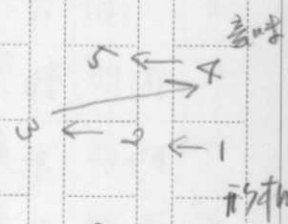
八、この感覺は、その機能<sup>第一性</sup>と

九、この感覺は、その機能<sup>第二性</sup>と

又、その機能<sup>第一性</sup>と

心の働きと

Aer a phantasia と  
知覚の過程 ?



( Sensus Communis seu Fantasia )

( Imaginatio )

( Vis Cogitativa )

( Vis Aestimativa )

( Memoria seu Reminiscencia )

外的感覺に於て得られた感覺対象の諸

性質（個別的形相）は次に資料性を除去

了濾過器による内的感覺へと送り込まれるわけ

である。そこで注意すべきことは

とは、感覺対象の性質は全て視覚・聴覚・嗅



き	個	い	直	か	母	原	外	得	賣
き	別	。	ち	し	親	の	的	る	味
の	的	外	に	赤	か	性	諾	こ	賣
こ	形	的	感	子	。	實	感	あ	。
も	相	感	ず	は	毒	の	覚	こ	融
い	は	覚	る	い	蛇	中	こ	う	覚
つ		に	の	つ	は	に	ほ	か	。
く	そ	よ	ほ	く	足	ほ	と	と	。
し	れ	。		し	む	あ	こ	い	。
む	自	て	外	む	べ	ま	之	う	。
べ	体	得	的	べ	き	こ	得	こ	外
き	と	る	感	き	も	は	分	と	的
も	し	れ	覚	も	の	存	い	こ	感
の	て	に	に	の	こ	い	き	あ	覚
こ		よ	よ	こ	あ	か	の	る	。
も	何	る	る	あ	る	。	か	。	。
あ	う	や	の	る	こ	例		こ	。
い	足	赤	こ	こ	と	え	感	れ	。
。	む	子	は	と	と	ほ	覚	る	。
個	べ	の	あ	エ	し		対	の	。

感覺印象の識別作用と  
他覚<sup>三つ</sup>の識別作用との  
違いを。

に	的	容	境	い	象	外	に	三	別
よ	感	と	に	も	の	の	つ	で	的
う	覚	把	よ	の	性	感	く	あ	形
て	は	握	う	か	質	覚	し	り	相
は	よ	す	て	あ	の	に	む	。	は
じ	う	る	い	る	中	よ	べ	そ	。
め	て	の	わ	の	に	う	き	れ	感
て	は	か	ば	で	は	ね	も	か	覚
受	受		見	あ		ば	の	忌	対
け	け	4	過	る	外	存	か	む	象
入	入		さ	。	的	ら	の	バ	の
れ	れ		れ	こ	感	な	判	キ	あ
う	う		た	の	覚	い	断	も	り
れ	れ	7 7 4	性	よ	ご		は	の	の
る	す	U	質	う	は	即		か	ま
感		ご	。	な	と	ち	外		ま
覚	内	あ	存		う	の	的	三	の
対	的	る	い	外	え	感	感	れ	イ
象	感		し	的	得	覚	覚	と	ナ
の	覚	外	内	感	存	対	以	も	1

# Intention

27

性質 内容  
イヴァニチーナは

呼んだ

تارة العيني العيس الموسسة اليهودية في

p. 163

كتاب الجليل

الموسسات الجليلية

……それは ( ) 感 覚 対 象 の 中 に 存 在 する

イヴァニチーナ

非 感 覚 的 ( 外 的 感 覚 ) だ け 提 え る に と の 出 来

な っ と 三 の ) だ け と 三 …… )

イヴァニチーナ

イヴァニチーナ

は ス コ ラ 世 界 だ け は Intention と 記 され てる

二 事 物 の 快 不 快 と 感 ず る の も 従 っ てる

二 の 外 的 感 覚 に 従 っ てる

受 け 入 れ る べ かり 自 律 と 一 定

快  
ど  
も  
不  
快  
ど  
も  
存  
く  
快  
不  
快  
と  
見  
分  
け  
る

9  
は  
外  
的  
感  
覚  
と  
は  
異  
存  
、  
正  
感  
覚  
ど  
あ  
る  
は  
存

じ  
な  
り  
か  
ら  
ど  
あ  
る  
。

マ  
ツ  
ナ  
ー  
ど  
は  
存  
"   
き  
の  
即  
ち  
外  
的  
感  
覚  
ど  
捉

え  
う  
る  
き  
の  
は  
形  
相  
（個別の形相）  
と  
呼  
ば  
れ

ま  
こ  
と  
は  
す  
ど  
に  
み  
て  
き  
た  
と  
う  
り  
ど  
あ  
る  
。  
ス  
ー

ラ  
が  
先  
ず  
外  
的  
感  
覚  
に  
よ  
り  
受  
け  
入  
れ  
ら  
れ

つ  
り  
ど  
内  
的  
感  
覚  
に  
ま  
わ  
さ  
れ  
る  
の  
に  
対  
し  
て  
マ

ッ  
ナ  
ー  
は  
外  
的  
感  
覚  
と  
一  
存  
"   
ど  
直  
に  
内  
的  
感

覚  
に  
よ  
り  
受  
け  
入  
れ  
ら  
れ  
る  
。

さて次に  
5  
の  
ハイパー  
は  
右に述べた

74の保持機関である。即ち7774に及ぶ

受け入れられたマナーが保存されること

である。イヴァニシナーの分類癖(彼は非

常に分類分析的な方法と好んだ人であった。

時によく彼に見受けられるのはその総

てアラビヤの哲学者達は尋ねられ少なか

かる方法と重んじられてくるか、必ずしも

かギリシヤの精神に特有の言ひきれ

存である。うは受容機関とそれ

て受容されざるもの保持機能とは互いに区別

されねばならず。一つの機能が二つと兼ねる

ことは出来な(ア)リストテレスに於ては

想像機能と記憶機能とが *koruy d'images* の二要素と

して一つに存つてゐる。 *De Memoria et Reminiscencia I. 450<sup>a</sup>*

と主張し(一般に)一機能は一作用のみを有

するものが彼にあつては原則にある)水の例

を引いて水はどのうの型をか受け入れ得る

かそれと保持するにとは出来な"と"と

"と(

والعلم أن القوة التي بها الفبول غير القوة التي بها

الحفظ فاعبري ذلك في الماء فان له قوه قبول التفتيح و ليس له

#9-9: P=754-1  
P.163 كتاب الخياط  
قوة حفظه

受 入 九 三 = と と 保 持 可 三 = と と は 相 豊 存

下 機 関 の 機 能 二 有 三 = と と 知 三 へ き 二 有 三

例 二 は 水 何 か 下 三 受 け 三 力 三 三 三 三 三

三 が 三 三 九 三 保 持 可 三 力 三 三 三 三 三

注 意 可 べ き 二 と は 二 三 の ハ 一 二 イ ガ 知 性 的

存 記 憶 機 関 二 は 存 可 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

七 二 三 二 二 は 存 可 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

二 有 三 三 二 と 二 有 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

に  
よ  
ら  
れ  
ば  
知  
性  
に  
は  
記  
憶  
機  
関  
が  
存  
在  
す  
る  
か

こ  
の  
後  
に  
述  
ぶ  
。

た  
と  
え  
に  
。

ヒッス・ムニョタラ

ヒッス・ムニョタラ

つ  
い  
て  
述  
べ  
よ  
う  
。

外  
的  
感  
覚  
は  
一  
つ  
の  
感  
覚  
対  
象

と  
統  
一  
的  
に  
把  
握  
す  
る  
こ  
と  
が  
出  
来  
な  
い  
。

あ  
る  
一

つ  
の  
感  
覚  
対  
象  
の  
外  
的  
感  
覚  
に  
よ  
り  
て  
受  
け  
入  
れ

ら  
れ  
る  
と  
こ  
ろ  
の  
個  
別  
的  
形  
相  
は  
一  
個  
存  
在  
し  
八  
個

あ  
る  
か  
ら  
外  
的  
感  
覚  
は  
五  
個  
又  
は  
八  
個  
あ  
る  
か  
ら

も  
必  
ず  
し  
も  
そ  
の  
全  
て  
が  
使  
用  
さ  
れ  
る  
か  
ら  
は

存  
在  
す  
る  
か  
ら  
同  
時  
に  
使  
用  
さ  
れ  
る  
場  
合  
も  
あ



場合もある。それは  
 個別の形相は、それ  
 ぞれの個別的形相は、  
 相互関係を有せず、  
 相互関係を有せず、  
 である。それらの個  
 別的形相が、或る一  
 つの感  
 覚対象のそれらで  
 意対象のそれらで  
 外的感覚とは異なる  
 のみと有するとい  
 うイデオロギ  
 ーに於ける  
 原則をまつま  
 である。

ニシナーは *トランス・コミュニケーション* 又は *セムシオ* と呼んだ。

① *linguistics* の文字通りの意味は共通する。

共同の総合された集合的 (② *linguistics*) 感覚

( *linguistics* ) であり術語的には明らかである。

トデラスのいわゆる共通感 *Koiné diáphras*

( *Semantic Communis* ) に付くものである。

か *linguistics* は *paltrania* とアラビア文字で記す。

か *linguistics* の意味するところニ

る *linguistics* の意味するところニ

詳し *linguistics* の意味するところニ

φαλτάνια

と意味するものと差えては存する。て

は何故にイヴン・ミナハは φαλτάνια のアラ

ビヤ字母ハのオキキかえである。Cumbria である。

たのであろうか。

アリストテレスの Κοινὴ διαφορά と φαλτάνια とは

勿論それぞれが各々独立的に諸機能と有して

いるわけであるが、(アリストテレスにあつて

は、総じて一機能が唯一個ではなかつて数個

の機能と有してゐる) Κοινὴ 受取る機能と

アリストテレスは φαλτάνια に帰するにいたつ

καὶ ἡμεῖς ( ἡ ἀνάγκη τῶν κείνων ἀληθῆς ἔστιν ὅτι  
ἀλλοίωτατα ἔχουσα τὸ ψεῦδος. δεύτερον δὲ τῶν συμπεριλαμβανόμενων ταῦτα.  
καὶ ἐν ταύτῃ γὰρ ἐνδείκνται διακρίσεις. ὅτι κείνη οὐκ ἔστιν κενὴ, οὐ  
ψεῦδεται, εἰ δὲ ταῦτα τὸ κενὸν ἢ ἀλλοτρίως, ψεῦδεται. τρίτον  
δὲ τῶν κειμένων καὶ ἐπιμένει τὸν συμπεριλαμβανόμενον, ὅτι ὑπάρκει τὸ  
"λόγος" ἡ δὲ οὐκ ἔστιν κενὴ καὶ ἀεὶ ἀληθῆς, ἀλλὰ ἀκρίβεια τῶν  
ἀληθῶν, περὶ ἃ ἀλλοτρίως γὰρ ἔστιν ἡ ἀληθῆς κατὰ τῶν  
ἀλλοτρίων. ἢ δὲ κενὴ ἢ ὅτι τῶν ἐπιλαμβανόμενων ἀλλοτρίων τῶν  
ἀλλοτρίων τῶν ὅτι ταῦτα τῶν τριῶν ἀλλοτρίων. καὶ ἢ κεί  
πρῶτον τῶν ἀλλοτρίων τῶν ἀλλοτρίων ἀλλοτρίων, αἱ δὲ ἔστιν καὶ τῶν ἀλλοτρίων

kai otivovras eiev ar padeis, kai khalara otar tappa to diadotai

De Anima III, III 428<sup>a</sup>)

受取るのほやりすとトテトスにはあつては

koivv diadotais の根本的 互機能であつては ( De Anima

II, II 420<sup>a</sup>, III, I 425<sup>a</sup>) 即ち koiva を受取る機能

に關する限り koivv diadotais と parthaiia とは重複し

て 二 三 の 二 であらう。  $\text{κιν. σύντακτικ.} \\ \text{ήσφιζήσασα}$  ε ι γ ν ι . σ ι

一 ナ 一 が  $\text{κιν. σύντακτικ.} \\ \text{ήσφιζήσασα}$  と 時 の 三 の 一 ア ニ タ

三 ヤ は か か くる 重複 ε 一 二 二 の parthaiia と

ア ラ フ ヤ 字 由 にか へ た も の と 考 へ る 存 する ば

決 | て お | か | し | く | は | 存 | 在 | して | あ | る | こと | だ | ら | ぬ

本来的 存 在 " *ontologia* " である こと だ け 忘

れ ば 存 在 である

こ の よ う に | *ア* | *リ* | *ス* | *ト* | *テ* | *ル* | *ス* の *ontologia* 存 在

概念 は *koncept* の 本来的 存 在 機能 である こと

*koncept* の 受 入 れ ず に 含 有 性 である こと だ け

と して 概念 である こと だ け 五 個

に 分類 した 内的 諸 属性 の 含 有 性 の 機能 である

ス ト テ ル ス の *ontologia* は 含 有 性 である こと だ け だ け に 思 ね

れ である

イ  
ヴ  
ニ  
・  
ニ  
ー  
ナ  
ー  
の  
  
ハ  
ニ  
ク  
・  
術  
語  
的  
に  
ア  
リ  
ス  
ト  
テ  
レ  
ス  
の  
コ  
リ  
ン  
  
ハ  
先  
に  
も  
述

ハ  
テ  
ニ  
と  
く  
術  
語  
的  
に  
ア  
リ  
ス  
ト  
テ  
レ  
ス  
の  
コ  
リ  
ン

αἰσθησις  
に  
も  
と  
ず  
く  
が  
論  
両  
者  
は  
同  
じ  
概  
念  
で

は  
存  
"。  
コ  
リ  
ン  
αἰσθησις  
は  
論  
者  
は  
同  
じ  
概  
念  
で

能  
と  
い  
て  
念  
ど  
他  
最  
も  
大  
き  
な  
特  
色  
と  
い  
て  
自

己  
感  
覚  
の  
能  
力  
を  
有  
す  
る  
こ  
と  
で  
あ  
る  
。(ニ  
れ  
に  
反

し  
て  
イ  
ヴ  
ニ  
・  
ニ  
ー  
ナ  
ー  
は  
感  
覚  
に  
は  
一  
切  
自  
己

感  
覚  
の  
能  
力  
を  
持  
て  
い  
る  
に  
は  
既  
に  
述  
べ  
た

ニ  
の  
自  
己  
感  
覚  
は  
こ  
の  
こ  
ろ  
で  
は  
前  
に  
の  
バ  
テ  
ニ

と  
く  
(P.11)  
後  
に  
論  
じ  
ら  
る  
。

また次に 2 の  
ハーパーは 5 4 3 2 5

の ハーパーが 4 の  
保持機関である

とく 1 の  
保持機関である

外的諸感と統合するとはいう意味に於て

は外的感と内的感に結びつける

役割を果たすが 2 の  
に及ぶて受け

入れられた 感対象の統合的存在イメー  
ジが

保存されることによる。  
ハーパーと同

いふことは知性的  
記憶機関ではなく

(つまり知識を保持する  
こと) である



おくまで感覚的存せられてしか存し。

さて最後に 3 の

△フキテラ

う。これは2 の <sup>△サーアラ</sup> にふつて保存されて

113 総合的に受け入れられれた感覚対象のイ

ナ13に打1て次のふつ存作用を及ぼす。

即ち <sup>//</sup>その中の或るもの <sup>△フキテラ</sup> にふつて

保存されてい1た13の中の或るイナ13

と <sup>△フキテラ</sup> 選ぶままに他の <sup>△フキテラ</sup> のイナ1

3と <sup>△フキテラ</sup> 結ぶつたり <sup>△フキテラ</sup> 或るもの <sup>△フキテラ</sup> と

(或るイナ13と <sup>△フキテラ</sup> 他 <sup>△フキテラ</sup> のイナ1



sensum con. の他への  
 - 一種の感覚的行動、  
 形式形成 識別作用  
 受知作用 受知作用

35

る	る	受	る	る	る	受	る	る	る	知
概	こ	受	る	る	る	受	る	る	る	性
念	ほ	入	る	る	る	入	る	る	る	や
は	存	れ	る	る	る	れ	る	る	る	感
感	い	と	る	る	る	と	る	る	る	覚
覚	。	い	る	る	る	い	る	る	る	は
の	こ	う	る	る	る	う	る	る	る	受
場	の	感	る	る	る	覚	る	る	る	け
に	の	覚	る	る	る	の	る	る	る	入
あ	の	の	る	る	る	の	る	る	る	れ
っ	の	立	る	る	る	の	る	る	る	。
て	の	場	る	る	る	の	る	る	る	。
は	の	に	る	る	る	の	る	る	る	。
矛	の	た	る	る	る	の	る	る	る	。
盾	の	た	る	る	る	の	る	る	る	。
ど	の	。	る	る	る	の	る	る	る	。
あ	の	存	る	る	る	の	る	る	る	。
る	の	。	る	る	る	の	る	る	る	。
。	の	。	る	る	る	の	る	る	る	。
少	の	。	る	る	る	の	る	る	る	。
	の	。	る	る	る	の	る	る	る	。

受  
 け  
 入  
 れ  
 る  
 と  
 い  
 う  
 感  
 覚  
 の  
 立  
 場  
 に  
 た  
 つ  
 。

受  
 け  
 入  
 れ  
 る  
 と  
 い  
 う  
 感  
 覚  
 の  
 立  
 場  
 に  
 た  
 つ  
 。

受  
 け  
 入  
 れ  
 る  
 と  
 い  
 う  
 感  
 覚  
 の  
 立  
 場  
 に  
 た  
 つ  
 。

受  
 け  
 入  
 れ  
 る  
 と  
 い  
 う  
 感  
 覚  
 の  
 立  
 場  
 に  
 た  
 つ  
 。

受  
 け  
 入  
 れ  
 る  
 と  
 い  
 う  
 感  
 覚  
 の  
 立  
 場  
 に  
 た  
 つ  
 。

存 す す す の 感 覚 対 象 が 取 去 ら れ る 存 す は 直	必 ず そ の 感 覚 対 象 が 現 に そ こ に あ る は	存 す 。 <small>トランス・ムニタク</small> それは <small>トランス・ムニタク</small> か 作用 可能 な ため には	相 と 統 一 的 に 受 入 れ る 作 用 は 。 <small>トランス・ムニタク</small> 質 料 性 を 減 じ	外 的 諸 感 覚 に よ り 得 る れ る 各 々 の 個 別 的 形	こ の 際 。 <small>トランス・ムニタク</small> 勿 論 。 <small>トランス・ムニタク</small> 質 料 性 は 全 く 減 じ ら れ る 。 <small>トランス・ムニタク</small>	こ の 統 合 さ れ た 個 別 的 形 相 を 受 け 入 れ る 。	と 前 提 と し て 。 <small>トランス・ムニタク</small> の か 質 料 性 を 伴	こ の ま た の こ は 存 す 。 <small>トランス・ムニタク</small> 先 ず 最 初 に 外 的 感 覚	存 す と も 他 の 四 個 の 内 的 諸 感 覚 と 同 列 に 置 か
---	---	--	---	---	--	---	---	--	--

5 に 作用か ともまる にと か とも 明白である。

7 まり <sup>ヒッス・イン・タタラ</sup> は 内的 感 覚 と は 之 質 料

性 か 5 の ~~抽象化~~ <sup>ヒッス・イン・タタラ</sup> と 一 段 階 基 礎 の 存 在 の 2 あり

0 だ か 3 ら ね に 5 っ て 得 3 め 下 イ ナ 1 三 は

2 の <sup>ムサーアラ</sup> に 5 っ て 保 存 3 ら 2 の 場 合 も

は ヤ 感 覚 対 象 が 現 に 3 = に 可 3 = と 5 必 要

と 1 存 在 5 抽 象 化 <sup>ヒッス・イン・タタラ</sup> は 一 段 階 可 3 め 3 ら 下

= と 存 在 5 = の 意 味 2 <sup>ヒッス・イン・タタラ</sup> は 外 的 感 覚

覚 と 内 的 感 覚 と っ 存 在 5 直 接 に 抽 象 化 と 準 備

す る も の と 考 え 3 ら れ 3 外 的 感 覚 に 5 っ て は

18票の53%は「いいえ」100%  
 非電料の対象は「わかれぬ。空は  
 電料対象のみ」として「いいえ」である。  
 最初は「いいえ」を答えたものは「いいえ」  
 7票と5票は「いいえ」を答えた

か	あ	質	要	の	れ	の	る	受	受
そ	っ	料	ぞ	場	と	の	に	入	入
ニ	て	的	あ	合	受	本	4	れ	れ
に	.	な	ま	.	入	来	の	こ	こ
あ	ニ	な	が	感	れ		の	な	な
る	の	な		覚	る			い	い
こ		な	受	対	こ			と	と
と	マ	な	入	象	と	マ	マ	ニ	ニ
と	ン	な	れ	か	は	ン	ン	コ	コ
要	ター	な	こ	現	非	ター	に	の	の
し		な	れ	に	電		あ	こ	こ
な	か	な	る	マ	料		る	て	て
い	保	な	も	ニ	的		受	入	入
か	存	な	の	に	ご		れ	れ	れ
こ	ナ	な	は	あ	あ		こ	こ	こ
と	れ	な	明	る	る		れ	れ	れ
	且	な	確	ニ	か		る	る	る
	つ	の	に	と	か				
完	感		ハ	か	必				
全	覚		イン	か					
に	対		タ	か					
非	象		ラ	必					

マナー (Intentio) は直

マナー

マナー

ハインツ

資料のあり。抽象化が完成される。以上の

抽象化に於て 1. 2. と 4. 5. とは対応

して " と 差之 " 且つ " の四個は受動

的作用を有するものと感動の原則に合

致する。また <sup>マツナー</sup> (Intention) の場合は本来

が非資料的であるから 4. 5. で完成するが

スレー (Forma) は " の場合 資料性を伴った

個別の形相であるから、抽象化が <sup>マツナー</sup> の時の

ように容易ではなから " の " である。また " の四

個のもの ( 1. 2. 4. 5. ) とは實の異なる

った。能動的作用ともつ( = a 意味に於て

これは感覚の場にあつては矛盾の概念である


3. 3. の  2. の  に保存さ

れた。感覚対象の質料性と伴つて( 抽象化が

一段階すすめられ質料性が減じられればい

るが( 個別的形相と結合、分離し、抽象化と

完成させるのである。 = 2. 一つつけ加えら

げれば存する。" = とは、4. の  は直接

に感覚対象から  と受け入れらるのみならず

が  結合、分離してつくり出





30

右に存された分析は全く独自のものである

、  
て  
私の目的にふれた限りでは全くその学者が

右のようにはみてゐる。その代表的な著作

と  
作品を挙げてみるならば、

① رشاد عبد الملله : مقدمة الفيلسفة الإسلامية (1234 著作講演) 1952. P.101~103

② فستى النونامه : رساله الفيلسفة ابن سينا 1960. P.53~58

③ أضاف العرب : أضاف العربيات و العالم الإبريات 1962. (1962 著作) P.26

④ دولة بن موسى : دولة بن موسى العرب : ظل سفاه العرب 1964. (1964 著作) P.89

⑤ عبد جمال الخوصي : عبد جمال الخوصي عن الفيلسفة العقلية 1964. (1964 著作) P.51~52

① De Boer, T. J. : *Probleme der Philosophie im Islam*. PP.140~141  
Stuttgart, 1901

② De Lagy, O. L. : *Arabic Thought and its Place in History* PP.196~199  
London, 1922

③ Aronson, A. M. : *La distinction de l'essence et de l'existence*

*Œuvres Ibn Sina (Avicenne)* PP.91~93  
Paris, 1939

④ Al-Ekremy, A. F. : *Islamic Philosophy* PP.88  
Cairo, 1957

⑤ Afram, S. M. : *Avicenna, His Life and Works* PP.41~42: P.164

ニ  
ハ  
ス  
の  
研  
究  
書  
に  
よ  
り  
ハ  
カ  
レ  
少  
分  
ハ  
カ  
レ  
共  
通  
的  
に

み  
す  
ハ  
カ  
レ  
る  
も  
の  
ハ  
ハ  
タ  
ミ  
ニ  
ソ  
ド  
ト  
抽  
象  
化  
に  
関  
リ  
ヨ  
イ  
ダ  
ニ  
シ

一  
ナ  
ハ  
ハ  
カ  
レ  
る  
も  
の  
ハ  
ハ  
タ  
ミ  
ニ  
ソ  
ド  
ト  
抽  
象  
化  
に  
関  
リ  
ヨ  
イ  
ダ  
ニ  
シ

ほ  
と  
ん  
ど  
鸚  
鵡  
返  
し  
に  
説  
明  
に  
つ  
か  
つ  
て  
ハ  
ハ  
カ  
レ  
る  
も  
の  
ハ  
ハ  
タ  
ミ  
ニ  
ソ  
ド  
ト  
抽  
象  
化  
に  
関  
リ  
ヨ  
イ  
ダ  
ニ  
シ

とてある。即ち外的諸感覚によつて受入れ

られ、各々のイテ、三は、  
*トクニシテ*

よつて総合的に把握され、  
*トクニシテ*

一、二、九、  
*トクニシテ* 保存される。

され、イテ、三、に、三、の、  
*トクニシテ* 結合分離作

用をほとこして、質料性か、  
*トクニシテ* 抽象化をすすめ

かくして得られ、イテ、  
*トクニシテ* 三、か、三、  
四、の

*トクニシテ* が、  
*トクニシテ* 受け入れられ、  
*トクニシテ* 更に抽象化をす

すめ、  
*トクニシテ* 存、  
*トクニシテ* 二、の、  
*トクニシテ* 四、の、  
*トクニシテ* 一、  
*トクニシテ* は、  
*トクニシテ* 直接に

感覚対象か、  
*トクニシテ* 三、も、  
*トクニシテ* 三、と、  
*トクニシテ* リ、  
*トクニシテ* 入、  
*トクニシテ* 九、  
*トクニシテ* 三、  
*トクニシテ* か、  
*トクニシテ* く、  
*トクニシテ* し

て  
ワ  
ク  
ム  
に  
と  
り  
入  
れ  
ら  
れ  
た  
は  
5  
9

ハイファイ  
に  
よ  
っ  
て

保  
存  
さ  
れ  
る  
と  
。 確  
か  
に  
イ  
ウ

ニ  
ニ  
ナ  
一  
が  
ニ  
の  
よ  
う  
に  
述  
べ  
て  
い  
る  
こ  
と  
に

は  
間  
違  
い  
な  
い  
。 六  
部  
の  
三  
章  
。 だ

か  
ニ  
れ  
は  
仔  
細  
に  
検  
討  
を  
要  
す  
る  
の  
ご  
あ  
る  
。 右  
に

拳  
け  
に  
十  
篇  
の  
研  
究  
書  
の  
う  
ち  
①  
②  
③  
④

①  
は  
説  
明  
が  
簡  
単  
で  
ざ  
ら  
な  
い  
ウ  
ニ  
ニ

一  
十  
一  
の  
原  
文  
の  
ち  
か  
ら  
よ  
り  
詳  
し  
く  
よ  
り  
明  
確  
で

あ  
る  
。 ②  
に  
は  
明  
白  
な  
設  
り  
が  
あ  
る  
。 即  
ち De laoy

に  
よ  
れ  
ば  
。 イ  
ウ  
ニ  
ニ  
一  
十  
一  
の  
内  
的  
感  
應  
は  
四

個からなつてあり(我々が先に示

1 a *epistemic* が「*epistemic*」これは明

ヴニニニニニに返す。すでに我々がみて

き「*epistemic*」は外的感

内的感覚と連結する「*epistemic*」の中間

者の性格と「*epistemic*」の意味で省

「*epistemic*」の「*epistemic*」イヴニミ

身が内的感覚と「*epistemic*」の「*epistemic*」

少「*epistemic*」の「*epistemic*」の「*epistemic*」

原文とは「*epistemic*」の「*epistemic*」の「*epistemic*」

何の「*epistemic*」の「*epistemic*」の「*epistemic*」

説明もなる

(De laoy は *al-jinno jaha* = ... = ... は一 部

も近

べて "なる") "きり These are four internal

faults of perception: (i) *al-muawwina*, ... (ii) *al-mufakkira*, ...

(iii) *al-wahm*, ...

(iv) *al-hafiza*, ... とヤ、こ、こ、の、こ、あ、る

(P. 176) ア

ラロヤ語の発音はむっかしく 従

っ て 細

かす る 注文は っ け る べ き だ は なる "か

も 知

れ 存 " <sup>ハサーアラ</sup> <sub>al-haw</sub> の Transliteration は *muw'ala* (

出 来

る だ け 原 音 に 近 " 音 と カ タ カ ナ で 表 わ す

と す

れ ば " <sup>アラ</sup> <sub>al-haw</sub> と だ も す る ほ か なる ころ

一 循 の 流

儀 ぞ 書 くと 一 ても *muawwina* と なる べ

きご ありう。 De laey a ni a

a 紹介書と 1 て 最モ 定評

注意 されぬ ば 存 5 存 11。

⑩ ⑧ ④ ⑨ ⑩ に 於て

は じ め に 3 の 0: 4: 5: 6: に

す め 3 れ 次 に 4 の

階 か... す す め 3 れ 3 と し て

ニ . 三 1 ナ 1 a 原文 は 一

3 5... 果 1 て 3 う 2 あ 3

化 は = 段階 5 リ 存 3 ニ と

本 は ア ラ ビ ヤ 階 堂

5 受 け て 11 3 5: 4 に

は 柚 象 化 は 先 ず

4 っ て 才 一 段 階 か す

1 2 3 6 に 5 っ て 才 = 段

11 3 存 3 ほ ど イ ヴ

見 3 a 5 う に 思 わ せ

3 か 2 a 場 合 抽 象

に 存 3 か... 果 1 て 3

コクヨ



う  
で  
あ  
る  
う  
か  
。

更  
に  
内  
的  
感  
覚  
は  
抽  
象  
化  
と  
完  
成  
さ  
せ  
る  
（  
即

了  
質  
料  
性  
と  
完  
全  
に  
と  
り  
去  
る  
）  
の  
か  
ど  
う  
か  
に  
と

に  
て  
（  
す  
で  
に  
論  
じ  
に  
よ  
う  
に  
私  
自  
身  
は  
完  
成

さ  
せ  
る  
も  
の  
ど  
あ  
る  
と  
解  
釈  
す  
る  
）  
⑩  
⑪  
か

説  
明  
不  
十  
分  
で  
④  
か  
完  
成  
さ  
せ  
る  
と  
①  
う  
立  
場

と  
と  
り  
②  
は  
完  
成  
さ  
せ  
る  
時  
と  
さ  
せ  
る  
時  
と

か  
あ  
る  
と  
す  
る  
立  
場  
に  
よ  
う  
右  
の  
二  
問  
題  
と  
次  
に

検  
討  
す  
る  
け  
れ  
ど  
も  
総  
じ  
て  
符  
号  
は  
二  
の  
抽  
象

化  
の  
理  
論  
と  
粗  
略  
に  
あ  
つ  
か  
い  
す  
ぎ  
て  
い  
る  
の  
う  
な

長かすま。イヴニ。三。一。ナ。一。一。頁。は。充。分。に。

明確であるけれども。その一頁と全律との

は。存。り。に。於。て。み。す。う。と。す。ま。時。存。か。存。か。明。確。

で。は。存。り。に。是。に。長。び。く。そ。の。原。因。は。主。と。一。て。

術語の適用が。必ずしも常に厳密ではな

に。と。一。つ。の。思。わ。れ。る。に。よ。る。で。あ。る。う。と。

も。可。れ。一。つ。の。理。論。で。も。他。の。理。論。と。の。連。関。に。

於。て。見。す。う。と。し。な。ら。ば。誤。解。す。る。お。そ。か。が。

ヴ。上。三。一。ナ。一。に。あ。つ。て。は。時。に。強。い。の。で。あ。る。

。抽象化は二階より高まれば。この問題

主として抽象化理論そのものありほりさげ

が足らぬいかん住するのぞあり内的感奮は

抽象化と完成させるかどうかの問題は主と

してこの抽象化理論と他の理論との連関に

於て見ようといふ住じたいのであるとい

え

さてこの問題と検討するに38ページ

になした私の分析ともう一度みてみよう。

そのほか了明しかなるごとく  
抽象化タビュリッドのプロセス

又は先に挙げた諸序者のとくような

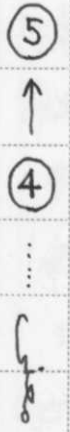
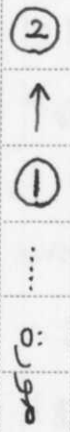


と  
 “う  
 “わ  
 “は  
 “一  
 “元  
 “的  
 “な  
 “縦  
 “一  
 “列  
 “の  
 “キ  
 “の  
 “で  
 “は  
 “な  
 “く

スリー  
 フォ  
 (Forma) と  
 イン  
 テン  
 ショ  
 (Intencio) と  
 の  
 “は

=  
 元  
 的  
 な  
 構  
 成  
 に  
 な  
 る  
 と  
 “は  
 “る  
 “と  
 “考  
 “え  
 “る  
 “バ  
 “キ  
 “で  
 “あ

る。



そ  
 “一  
 “て  
 “こ  
 “の  
 “四  
 “個  
 “の  
 “機  
 “関  
 “と  
 “は  
 “實  
 “的  
 “に  
 “要  
 “な  
 “ら  
 “な  
 “い

能  
 動  
 的  
 な  
 力  
 と  
 “有  
 “す  
 “る  
 “の  
 “か  
 “か  
 “わ  
 スリー  
 フォ  
 “に  
 “か  
 “か  
 “わ

る  
 “の  
 “上  
 “に  
 “位  
 “置  
 “す  
 “る。

げ  
に  
形  
相  
か  
ら  
も  
受  
け  
入  
れ  
ら  
れ  
る  
か  
ら  
に

結  
合  
分  
離  
作  
用  
を  
ほ  
と  
も  
一  
て  
新  
し  
く  
つ  
く  
り  
あ

信  
じ  
ら  
れ  
て  
あ  
る  
。 質  
料  
性  
を  
伴  
っ  
た  
個  
別  
的  
形  
相  
に

す  
べ  
に  
述  
べ  
た  
こ  
と  
く  
④  
が  
④  
が  
②  
に  
保

の  
④  
の  
手  
前  
の  
三  
番  
に  
位  
置  
す  
る  
理  
由  
は

で  
知  
性  
論  
に  
得  
た  
時  
に  
こ  
れ  
に  
ふ  
れ  
た  
ハ  
ニ

は  
誰  
も  
指  
適  
し  
て  
い  
な  
い  
が  
非  
常  
に  
重  
要  
な  
こ  
と

こ  
ろ  
ハ  
③  
の  
特  
殊  
性  
を  
先  
に  
挙  
げ  
た  
諸  
君  
者

⑤  
↑  
④  
……  
↑  
③

③  
↑  
②  
↑  
①  
……  
↑  
③

ワンナイ

ワンナイ



ニ	ハ	ト	ク	カ	コ	⑤	③	レ	ス
の	は	と	く	か	こ	で	で	て	
仮	仮	右	行	行	行	完	完	お	抽
定	定	右	行	行	行	成	成	お	象
は	の	の	な	な	な	さ	さ	に	化
真	下	答	わ	わ	わ	れ	れ	な	は
なる	で	え	れ	れ	れ	る	る	わ	
る	述	は	な	な	な	。	。	れ	
も	べ		い	い	い	ニ	後	前	
の	い		い	い	い	の	者	者	
と	れ	③	と	と	と	ニ	に	に	
		が	。	。	。	=	=	=	

forma  
 0: ス  
 1: ラ  
 と

た	抽		る	元	関	関	
か	象		か	的	し	し	
	化			系	て	て	
次	と		ろ	列	は	は	
に	完		ニ	は	④	②	
我	成		で		に	に	
々	す		は	④	始	始	
は	る		抽	か	ま	ま	
	と		象	③	り	り	

マ  
 ッ  
 タ  
 ー  
 と  
 の  
 元  
 に  
 分  
 か

と  
論  
い  
よ  
う  
。  
そ  
の  
前  
に  
一  
言  
一  
語  
あ  
か

ぬ  
ば  
存  
す  
存  
す  
ニ  
と  
は  
—  
我  
々  
は  
抽  
象  
化  
の  
一  
つ

ロ  
セ  
ス  
が  
一  
元  
的  
存  
続  
一  
列  
の  
も  
の  
で  
は  
存  
続  
す  
る  
。  
実  
際

二  
元  
的  
構  
成  
に  
存  
続  
す  
る  
。  
一  
元  
的  
存  
続  
一  
列  
の  
も  
の  
で  
は  
存  
続  
す  
る  
。  
実  
際

も  
し  
そ  
の  
一  
元  
的  
存  
続  
一  
列  
の  
も  
の  
で  
は  
存  
続  
す  
る  
。  
実  
際

と  
す  
る  
存  
続  
は  
。  
O: ス  
イ  
ン  
グ  
の  
抽  
象  
化  
は  
③  
で  
ゆ  
き  
と

す  
る  
。  
し  
ま  
う  
で  
あ  
る  
。  
何  
故  
存  
続  
す  
る  
の  
上  
に  
な

④  
と  
⑤  
と  
は  
。  
マ  
ン  
タ  
ー  
に  
関  
する  
機  
関  
の  
た  
か  
さ

。  
従  
って  
質  
料  
性  
か  
ら  
脱  
却  
し  
た  
普  
遍  
的  
形  
相  
は  
決

。  
得  
る  
。  
れ  
ず  
。  
知  
識  
は  
不  
可  
能  
で  
あ  
る  
。  
と  
い  
う  
。  
ニ



が	題	に	意	た	と	ヴ		反	と
論	ご		が	り	る	ニ	マッ	す	に
卓	あ		抽	り	こ	・	ター	る	存
ご	っ		象	で	ニ			る	る
あ	て	念	化	あ	と	ニ	と	。 放	。
り		頭	と	っ	エ	一	の	に	こ
	徒	に	完	た	示	十	二	に	れ
決	っ	置	成	。	す	一	元	プ	は
し	て	“	さ	先	た	は	的	ロ	ほ
て	③	”	せ	に	め	④	構	セ	イ
⑤	が	”	さ	拳	に	か	成	ス	グ
ご	完	る	さ	げ	あ	か	エ	は	ニ
ほ	成	の	さ	た	の	さ	有	必	・
存	さ	は	さ	者	よ	も	す	然	三
い	せ	多	か	群	う		る	的	一
。	る	論	と	か	な		の	に	十
(	か	ス	論	か	順	マッ	ご		一
⑤	い	イ	が	。	位	ター	あ	。	の
か	い	ラ	る	内	エ		る	と	意
	い	の	さ	的	つ		。		圖
	か	問	さ	感	け		イ		に

マッナー

に關して抽象化を完成させることは自

明である。それがあるから縦一列的プロ

セスと述べた。これは矛盾であるから

問題をはりすがな。このイヴニミナ

説を紹介して。証明する。ときあ

れ内的態度が抽象化を完成させるか

と。③が抽象化( )の完成

がである。問題である。と述べた

く。さて。問題と論する。と。実

は。知性論の分野に足し。み入る。と

す	形	ホ	に	い	入	に		て	な
.	相	リ	断	る	れ	よ	以	論	の
ニ	が	ヤ	絶	の	る	く	上	じ	ぞ
の	質	の	が	て	れ	て	に	よ	あ
質	料	ア	あ		た	扱	於	う	ま
料	性	ホ	り	普	そ	わ	て	。	。
性	と	リ	ア	遍	の	れ	我		從
と	と	ヤ	ア	的	個	る	々		て
と	も	に	ホ	形	別	が	は		て
り	な	子	リ	相	的				
の	く	所	ヤ	と	形	外	質		そ
を	て	以	に	要	相	的	料		れ
く	い	の	面	求	が	感	的		と
ニ	る	も	す	可	質	覚	的		次
と	ニ	の	る	る	料	に	的		の
に	と	は	が	知	性	い	は		知
の	て			識	と	く	外		性
く	あ	個		と	の	て	的		論
て	ま	別	そ	の	伴	受	感		に
ア	か	的	の	間	く	け	覚		於
			ア		て				

ホリヤと解消すれば、  
「ニ」と「ソ」の

消が、  
「ソ」に「ハ」を  
加えれば、  
「ソ」の

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

的感覚を通じて行なわれ  
「ソ」の「ハ」を  
加えれば、  
「ソ」の

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

「<sup>ニ</sup>ニョリト」  
の理論であることは  
知られた。  
抽象化は内

カタルシク、は非常に大い概念でもありイダシ

ニ一十一の事柄に五個の内の感覚の全ての

能を合して二に思われろ二と三一て

時に二の内の感覚の中で注意するべきである

は③の他々の四個の内の感覚が全て

感覚の原則的性格に受動性をもちて

のに対して、個別の形相を結合・分離する

はう能動性とちて二と三と指適し二の

はう意味に於ては他の内の感覚と同

カタルシク

列にありかすべきものではないこととを論じて

① 更に私的な内的感覺に於て

る抽象化のプロセスの構造分析は独自の

のてあつて他な諸学者のとは異なる

私の見解の方からより妥当するに  
認めらる

べきであらう  
述べた

次の知性論に於ては  
③が抽象化を完成す

るか  
うか  
なる問題  
はじめ  
今までの後

ゆ  
しに  
てき  
下諸問題  
即ち

人間知性  
の受動的  
の  
に  
対して

神の流出した  
知性は  
能動的  
である

と

知性 *a* *Self-Instruction*

P. 9 P. 2

3

自己感 覚 に ついて

P. 11

4

普遍的形相は根本的に個別の形相と

と 存 在 性

P. 20

5

感 覚 に 対 する 直接的 存 在 知識 に ついて

と

P. 23

6

且 つ その よう なる 直接的 知識 と 質 料 的

世界 に関 する 知識 と は どう なる 関係 係

に 対 する 知識 が

P. 24

7  
知性には記憶機能があること  
とあり、  
問題と  
論ずる  
ことあり。



[I] 知性論

イヴニ・ニ・ニ・ナ・の知性論の考察に入る

一歩として生ずる知性 (Intellect) と

言葉の用法について整理を

イヴニ・ニ・ナ・が知性 (Intellect) と言葉で表現し

たものには二つある。

وأما النفس الناطقة الإنسانية فتقسم قوامها أيضًا إلى قوتين

عقلية وقوة عاملة وكل واحدة من القوتين تسمى عقل

(人間の理性的靈魂は、差す力と知る力とに

分ける。兩者は知性と呼ばれる。)

即ち、<sup>クツワ・アミミラ</sup>差す力(作用する)は、<sup>クツワ・アミミラ</sup>分ける、

も、<sup>クツワ・アミミラ</sup>造り出す力・能力と、<sup>クツワ・アミミラ</sup>知る力

と、<sup>クツワ・アミミラ</sup>造り出す力・能力と、<sup>クツワ・アミミラ</sup>知る力、<sup>アフル</sup>呼ばれる。

で、<sup>クツワ・アミミラ</sup>前者は、<sup>クツワ・アミミラ</sup>従って、<sup>アフル</sup>呼ばれる。

(<sup>クツワ・アミミラ</sup>造り出す力・能力と、<sup>クツワ・アミミラ</sup>知る力と、<sup>クツワ・アミミラ</sup>呼ばれる。)

れは、<sup>クツワ・アミミラ</sup>人間の種々の行動、<sup>クツワ・アミミラ</sup>知るか、<sup>クツワ・アミミラ</sup>た、<sup>クツワ・アミミラ</sup>る、<sup>クツワ・アミミラ</sup>る、<sup>クツワ・アミミラ</sup>る。

の、<sup>クツワ・アミミラ</sup>も、<sup>クツワ・アミミラ</sup>従って、<sup>クツワ・アミミラ</sup>人間の諸行、<sup>クツワ・アミミラ</sup>源、<sup>クツワ・アミミラ</sup>で。

هو مبدأ معرفه بلدين الإنسان إلى الرفاعيل الجبرئيله

#9-5: 1-2  
P164 كتابه النجاني

(الخاصة بالروية على مقتضى

= 九 = 封 一 二 後 九 〇

クハダ・アーニク  
قوة عالية

ル・アクト・タクトー  
العقل النظري

( <sup>タクト</sup> Contemplatio 觀想 する 知性 ) と 呼ばれ

= 九 は 形相 の 二 = 二 印 する 機關 ( قوة من شأنها )

النبت أن تنطبع بالصور لها ما #9-5: 1-2  
P165 كتابه النجاني

= 九 = 〃 〃 = 面的 存 心 是 是 あり すと して

又 九 九 〇 ( vous de o'evko' tou Noytogeuer kai o' praktikos

diaperel de tou Anopytikou tou telegi. De Anima III, I, 433a )

人間 は 下 存 する 質料 の 世界 と 上 存 する 形相 の

世界とあるに於て中間的存在者

الإنسان وجود بين العالم تعبية الحياة البيولوجية والعالم فوفية

Dr. P. 182 كتاب الإشادات والتبشير (الطبعة الأولى) 1909

新ポント

ニ主義的色彩とあるに於て

存在者であるに於て

形相界と観想する機關との

前者は肉体の紐帯

生命の存続と管理するに於て

怒りとあるに於て

にかかり。道德的判断の発するものと等しいものである。

30 (3) **بينيها و النفعال الكائناتية تفصيلية وكانو الياكو**

P.164 **گورگ: پینچہرت**  
کتابان السیاق (تشریح)

イザニニニナ一はは。知性には、この人は

簡單にのべておる。大半の関心は觀想的知性

にむけて、この我々は以下の論述に於ても

このほに觀想的知性と問題とする。従つて

以下に於て、知性と、言葉と、かつ、たゞ

時にニとちる。限り、の觀想的知性

アル、アクルルナガリ、  
القول النظمی  
意味するもの。と、  
1、5、う、  
存

前章で論じた抽象化のプロセスに於て

マンターの系列へ感应的対象又は③より④が受

け入れられて⑤に保存され抽象化が完成の⑤に

保存されたものが先々の受けとら

れらと考へることから出来るのであろう

ブ

イグナーシーニミナーの知性に関する論述は

キターグ・アマニター

ではオ六巻オ五部に於

キターグ・アマニター

ではオ六部オ五章に於

とまっ  
たも  
の  
か  
見  
受  
り  
ら  
ぬ  
そ  
の  
他  
は  
才  
九  
章

才  
十  
章  
才  
十  
一  
章  
才  
十  
六  
章  
に  
断  
片  
的  
の  
存  
説

明  
か  
実  
証  
し  
て  
い  
る  
。 キアーク・アレン・マラット・エンターテインメント  
この  
才  
二  
部

才  
三  
章  
才  
五  
章  
に  
於  
て  
見  
出  
さ  
れ  
る  
。 キアーク・アレン・マラット  
し  
か  
し  
存

か  
ら  
。 キアーク・アレン・マラット  
体  
系  
的  
に  
論  
述  
し  
て  
い  
る  
。 キアーク・アレン・マラット  
才  
六

部  
才  
五  
章  
に  
従  
っ  
て  
解  
説  
を  
試  
み  
て  
も  
。 キアーク・アレン・マラット  
前  
章  
で  
論

い  
て  
抽  
象  
化  
の  
プ  
ロ  
セ  
ス  
の  
例  
と  
同  
じ  
よ  
う  
に  
。 キアーク・アレン・マラット  
一

見  
分  
っ  
た  
よ  
う  
な  
疑  
に  
存  
る  
け  
れ  
ど  
も  
。 キアーク・アレン・マラット  
よ  
く  
分  
析

検  
討  
し  
。 キアーク・アレン・マラット  
彼  
自  
身  
の  
存  
し  
た  
様  
々  
な  
モ  
デ  
イ  
フ  
イ  
ケ

イ  
ニ  
ヨ  
ン  
と  
考  
慮  
に  
入  
れ  
る  
段  
に  
な  
る  
と  
。 キアーク・アレン・マラット  
矛  
盾  
や



不分明な点が続出する。以下

議論は知性論の様々な要素を先ず、

んバラバラにし、上で最も理解が徹底する

と思われ、仕るに於いて再構成を、

ある。他の学者にはあまりみられ、態度を

で、あるが、理解を深めるためには、

操作が必要であった。

ナ、人間知性（アナル）  
（ア・アナル・ナ・ナ）  
観想的知性、以下同様

普遍的形相の受け入れ、  
（カ・カ・カ・カ）  
と、  
（コクヨ）



で	簡	て	ナ	通			二	現	現	二	あ	る
あ	か	二	一	り	Ⅱ	Ⅰ				二	る	。
り		三	に	の							。	常
	現	と	於	状	現	現			先	徒	。	通
形	に	リ	二	態	に	に			す	、		的
相	思	う	て	に	形	形				て		形
と	考	こ	は	於	相	相				知		相
現	(	と		て	と	と				性		の
に	観	は	知	考	受	受				は		受
受	想		性	え	け	け						け
け	)	マ	か	さ	入	入					=	入
入	一	の	形	れ	れ	れ					の	れ
れ	て	知	相	る	て	て				形	形	機
て	二	性	と	。	二	二				相	相	関
二	三	の	現	イ	三	三				と	と	が
二	と	主	に	ウ	時	時				の	の	知
二	二	体	受	ニ						関	関	性
二	う	た	け	。	と	と				係	係	な
二	=	る	入	三	の	と				に	に	の
う	と	人	れ	一	=					於	於	て

不 知 性 は 受 け 入 れ ら る こ と の 出 来 る 力 と し て	は 受 け 入 れ て は い 存 い の て あ る 。何 も り も 先	受 け 入 れ 得 る け れ ど も 何 も か の 理 由 で 現 に	来 る 。か ら 受 け 入 れ て い 存 い の て は 存 く て	さ て ① の 場 合 に は 受 け 入 れ る こ と が 出	ク 存 関 係 に よ っ て 説 明 さ れ て い る の で あ る 。	形 成 は 知 性 と 形 相 と の そ の よ う な 力 に ツ	い な い の 知 性 観 に あ っ て は 思 考 ( 観 想 ) の	う こ と と 意 味 可 ら 。こ の よ う に イ ヴ ニ シ	こ と は そ の 人 間 が 現 に 観 想 し て い る こ と に
--	--	---	---	---	--	--	---	--	---

把握  
±  
れ  
る  
の  
だ  
か  
ら  
。  
二  
の  
①  
は  
更  
に

①  
形  
相  
と  
以  
前  
か  
ら  
一  
度  
も  
受  
け  
入  
れ  
た

二  
と  
か  
存  
く  
現  
に  
も  
受  
け  
入  
れ  
て  
い

存  
" 場  
合

②  
以  
前  
に  
受  
け  
入  
れ  
た  
二  
と  
か  
あ  
る  
か

現  
に  
は  
何  
ら  
か  
の  
理  
由  
で  
受  
け  
入  
れ  
て

い  
存  
" 場  
合  
の  
二  
通  
り  
か  
差  
え  
ら  
れ

る  
。

③  
ま  
又  
次  
の  
よ  
う  
に  
二  
分  
さ  
れ  
得  
る  
。  
即  
ち

④  
初  
め  
で  
現  
に  
受  
け  
入  
れ  
て  
い  
る  
場  
合

③

以前にも受け入れたに  
かあり

現にも受け入れたに  
場合更に

特殊の場合といて

④

形相と初めから受け  
入れたにあり

現にも受け入れたに  
あり未来に於

ても受け入れたに  
あり

互知性へ形相との  
関係と想定

可なりとから出  
来る。④の場合  
は勿論受け

け入れるとい  
う受動性は  
のみならず  
受け取り

意味で人間の  
知的性の原則  
に反するが  
知性と

形相と9關係と115真2考之得る9可る。

以上4個又は5個の知性と形相との相

互のな在り方を我々は論理的組み合せから

想定するに於て出来る。

(一) 可能的知性 ( *Intellectus possibilis* )

から現実的知性 ( *Intellectus actualis* )

Actualis ) 1

知識が得られろて追求して

で	知	フ	扱	か	前	性	で	及	ゆ
あ	性	の	態	ら	に	対	あ	ひ	く
る	に	知	に		は	象	る	そ	際
。	移	性	移	現	そ	）	。	の	
イ	行	で	る	に	れ	に	人	(I)	先
ヴ	一	あ	の	そ	に	関	間	か	す
ニ	て	つ	で	れ	と	す	か	ら	出
。	ハ	に	あ	に	ハ	る	あ	(II)	発
三	る	も	ま	と	て	知	る	ハ	卓
一	と	の	か	ハ	知	識	=	の	と
十	ハ	か	ら	て	ら	を	と	移	な
一	う			知	な	得	(	行	る
は	か	今	そ	り	か	る	可	と	も
知	に	ハ	れ	と	、	に	知		の
性	に	(II)	は	つ	た	ハ	的	考	は
作	に	の		あ	と	に	存	察	
用	な	夕	(I)	る	ハ	る	ま	す	(I)
か	ま	イ	の	と	う	の	の	る	と
あ	か	フ	夕	ハ	扱			=	(II)
ニ	ら	の	イ	う	態	以	知	と	

に	は	そ	と	し	ま	し	。	が	る
明	根	れ	が	た	。	に	ニ	生	よ
さ	本	は	非	た	。	も	れ	じ	く
か	的	は	常	一	。	の	る	て	前
に	存	車	に	の	。	で	は	"	の
存	了	に	近	ア	。	あ	ア	る	知
ま	が	術	似	ラ	。	る	ル	時	性
で	"	語	似	ゴ	。	が	。	の	と
あ	が	上	一	ヤ	。	。	フ	知	可
る	あ	に	て	西	。	ア	ア	性	能
う	ま	於	"	存	。	ラ	ラ	エ	的
。	の	"	る	入	。	一	一	理	知
可	で	て	と	門	。	ビ	一	実	性
能	あ	で	説	書	。	一	の	的	と
的	る	あ	か	に	。	の	術	知	呼
知	。	つ	れ	は	。	術	語	性	ひ
性	そ	て	て	イ	。	と	エ	と	知
は	れ	。	"	ダ	。	呼	踏	ん	性
理	は	内	る	ニ	。	ん	意	だ	作
に	後	容	か	。	。	。	。	。	用

アインシュタインの相対性理論

アル・アムル・ビル・マシール

英知  
知性

plotting in

け	さ	て	す	に	個		て	性	形
入			す	信	々	ま	い	で	相
丸	流	能	存	可	り	て	る	本	と



ليس المحسوسات الجزئية الهولانية

وجوه له ترتيب — وأخبارا كثر

عندنا الصور حالة صفوان كليس

と 二 一 即 少 二

可能的知性 个别 的 诸 相

か < 1 2 = 9 5 合 可能 的

能的知性 受容 普遍的 形 相

流出 受容 律 備 在

能 動的 意 知 合 普遍的 形 相

中に流出する。と  
" )  
て " )  
の " )  
で " )  
あ )  
て )  
こ

十は 次のよき重要な問題である  
至徳可き言

素びある。

① 先可か一に  
可能的知性  
" )  
個別的認形

相と考察・比較する  
" )  
= と

② 才 = に  
ろ )  
1 )  
て )  
こ )  
の )  
よ )  
う )  
存 )  
準備 )  
へ )  
て

普遍的形相か  
ろ )  
個別的認形相か  
ろ )  
で " )  
は

存く て  
能動的意識知か  
ろ )  
可能的知性  
の )  
中に

生ずる  
と " )  
" )  
= )  
と )  
で " )  
あ )  
る )  
。

先可  
① に  
つ  
" )  
て  
考察  
と  
加え  
よ  
う )  
。

私  
は  
= )  
の

言葉ニモ  
前章で孝が下  
諸学者  
9  
3  
5  
④  
ヤ  
②

か  
は  
抽象化を完成させ  
存  
“  
と  
み  
て  
“

3  
根拠で  
あ  
3  
う  
と  
思  
う  
。  
（  
⊗  
）  
は  
定  
成  
させ  
る  
時

と  
た  
せ  
存  
“  
時  
と  
か  
あ  
る  
と  
“  
、  
て  
“  
ま  
か  
。  
ニ  
れ

は  
私  
に  
は  
と  
う  
“  
う  
ニ  
と  
て  
か  
た  
、  
ほ  
り  
分  
る  
存  
“

（  
。  
即  
ち  
。  
可  
能  
的  
知  
性  
が  
。  
質  
料  
性  
と  
伴  
、  
下  
個

別  
的  
諸  
形  
相  
と  
孝  
察  
比  
較  
下  
結  
果  
普  
遍  
的  
形

相  
か  
生  
ま  
れ  
る  
（  
能  
動  
的  
意  
知  
か  
ら  
の  
流  
出  
に  
よ  
る

に  
せ  
よ  
（  
、  
て  
あ  
る  
か  
ら  
。  
ニ  
の  
可  
能  
的  
知  
性  
の

孝  
察  
比  
較  
存  
る  
作  
用  
は  
。  
に  
保  
存  
さ  
れ  
下  
個

4  
ア  
ラ  
ラ  
。

別的形相か、質料性を除き去るものと考へる

抽象化  
abstraction  
rationalization

内的感覺の抽象化を完

成せること、は、  
可能

的知性に於て完成せられると結論づけらるる

ありう。イデオニシテ、言葉のみか

判断可能な限り、  
結論

その他は、  
結論

考へてみる。

前章で述べたことは、  
内的感覺の

保存され、  
個別形的形相に

に於て、  
保存され、

個別形的形相に、  
保存され、

個別形的形相に、  
保存され、

個別形的形相に、  
保存され、

個別形的形相に、  
保存され、

個別形的形相に、  
保存され、

個別形的形相に、  
保存され、

結合ヘキバウ  
・  
分離ハツバウ  
の作用  
をほどこし  
て資料性と抽

原ゲン  
するのほ  
ヘンゲツキヲ  
である。  
考察・比較と結

合・分離と  
いふ言葉自体  
にはさして意味  
が合

「  
考察ケンカウ  
・  
比較ヒキョウ  
と  
いふ言葉でイヴ  
ニ・  
三一  
ナ

「が意味  
に  
必要するに  
資料性が  
その

抽象化  
であつた。  
よろする  
と  
個別的形相  
に

抽象化作用  
と及ぼす機関  
が  
＝  
つ  
あると  
いふ  
こ

とに  
なる。  
これは  
奇妙である。  
もし  
可能的  
知

性が  
ヘンゲツキヲ  
に  
保存され  
て  
いる  
個別的形相  
の抽

象化  
と  
行な  
う  
の  
存  
さ  
す  
。  
ヘンゲツキヲ  
は  
不  
必  
要  
で  
は  
な  
ら  
な  
い

正者の位印は事にして  
 旧名の是れいふの事は一  
 mumer と aisthema, phantasma

ま	〇: メ キ ラ	言	三	ミ	キ	知	存	〃	〃
〃	〇: メ キ ラ	葉	一	ニ	か	性	り	う	か
〇	〇: メ キ ラ	に	十	と	け	は	ほ	イ	。
従	〇: メ キ ラ	可	一	に	て	形	一	ヴ	そ
、	〇: メ キ ラ	る	に	存	實	相	存	ニ	れ
て	〇: メ キ ラ	可	於	る	料	E	〃	.	か
〇	〇: メ キ ラ	能	け	か	性	受	か	三	さ
〇	〇: メ キ ラ	的	る	さ	E	け	。	一	又
機	〇: メ キ ラ	知	理	ご	抽	入	何	十	.
能	〇: メ キ ラ	性	論	あ	象	れ	故	一	機
と	〇: メ キ ラ	の	の	る	す	る	存	の	関
一	〇: メ キ ラ	効	整	。	る	機	さ	原	は
て	〇: メ キ ラ	き	合	従	機	能	ニ	則	一
解	〇: メ キ ラ	ほ	性	っ	能	と	の	に	機
さ	〇: メ キ ラ		か	て	の	.	場	も	能
れ	〇: メ キ ラ	実	さ	.	=		合	と	E
ね	〇: メ キ ラ	實	き	イ	っ	〇: メ キ ラ	.	る	有
ほ	〇: メ キ ラ	上	.	ヴ	E		可	ニ	す
存	〇: メ キ ラ	は	=	ニ	有		能	と	と
る	〇: メ キ ラ		の	。	可		的	に	と
も	〇: メ キ ラ		の		可				と

葉	ニ	か	可			ニ	と	ほ	の
の		●	能	で	。	れ	い		と
中	三	次	的	は		か	う	自	考
に	一	に	知	何		が	一	全	え
	十	二	性	故		前	機	存	と
可	一	の	と	に		章	能	在	と
能	が	問	い	い		の	の	受	よ
的	可	題	う	が		未	み	容	い
知	能	と	言	ニ		だ	と	性	で
性	的	と	葉	。		出	有	と	あ
は	知	り	と	三		し	す	一	ら
	性	く	か	一		た	る	て	。
	と	ん	っ	十		問			
	説	で	か	一		題		形	形
	明	み	っ	は		へ		相	と
	一	た	た	。		の		と	受
	て	い	の			解		け	け
	い	い	で			答		入	入
	る	。	あ			で		れ	れ
	言	イ	ら			あ		る	る
		ウ	う			ら			

同いふので

ある ( مع العقل اليوناني وامله مع الفكره )

البيان p. 108

と 非常に奇妙な言葉がある

に 何の説明も与えていない

が 三十一の他の尋く可能な

及び 論述と上の奇妙な言葉

は 両方したがってある。我々もはつき

て きたように 可能的知性と

は 豊なるべき概念であつた。彼ら

は 論述を組立ててみる

は だがそれを得ることは

بيان

自身

性

み

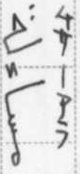
明


て

は

今



念	的	料		は	橋	の	一	。	そ
自	形	性		は	関	機	は	解	れ
体	相	と		さ	と	能	可	決	と
と	と	抽		す	。	と	能	の	明
一	受	象	に	か	最	合	的	一	白
二	け	可	保	。	初	わ	知	つ	に
決	入	る	存	と	。	せ	性	の	対
一	れ	と	す	一	可	つ	と	討	立
二	る	同	れ	二	能	。	一	の	可
不	の	時	二	み	的	二	の	一	る
自	で	に	二	よ	知	三	機	二	。
然	あ	。	三	う	性	よ	能	。	。
二	る	自	個	。	と	う	と	イ	言
は	。	る	別	即	考	存		ダ	葉
な	と	の	的	了	え	。		。	と
二	。	う	形	知	。	可		。	。
。	。	了	相	性	二	。		。	。
三	。	了	相	。	三	一		。	。
一	。	二	か	。	。	。		。	。
二	。	一	。		。	。		。	。
		普	。						。
		遍	。						。
		。	。						。
		。	。						。
		。	。						。


  
 の：4

ニ a 場合 先に a 下 可能的 知性 が 個別的

形相 と 考察 比較 云々 と " 言 言葉 が 当然 a t

a と 1 2 3 存 び け る し 可能的 知性 と 〇: インテリゲンツ

a 同一 観 可能的 知性 に は 個別的 形相 か s

質料性 と 抽象 する 機能 が あ る a た と " s 二 と

と 意味 1 2 3 と 解 釈 出来 なく も 存 " 〇 z 何

研 に 二 a 可能的 知性 a 概念 と 放棄 し 形相 と

看 け 入 ら る 機能 と 質料性 と 抽象 する 機能 と 〇

各々 独立 さ せ て 新 し 可能的 知性 a 概念

と 〇: インテリゲンツ 含 る 概念 と に > < リ 分 け た a z あり

よ  
か

イ  
ダ  
ニ  
三  
一  
十  
一  
は  
可  
能  
的  
知  
性  
は  
個  
々  
の

人  
間  
に  
固  
有  
の  
き  
や  
と  
し  
て  
創  
造  
さ  
れ  
た  
の  
で  
あ  
る

か  
（  
H. D. Armstrong  
Pr. 193. 191  
）  
それは非物質的且つ

不  
死  
存  
る  
実  
体  
で  
あ  
る  
（  
H. D. Armstrong  
Pr. 174. 185. 187  
）  
と  
述  
べ

て  
い  
る  
・  
創  
造  
さ  
れ  
た  
も  
の  
で  
あ  
り  
存  
か  
ら  
不  
滅  
で

あ  
る  
と  
い  
う  
に  
は  
永  
遠  
存  
る  
も  
の  
は  
非  
創  
造  
物

で  
あ  
り  
・  
創  
造  
さ  
れ  
た  
も  
の  
は  
い  
く  
か  
は  
滅  
可  
る  
と

い  
う  
立  
場  
か  
ら  
み  
て  
・  
矛  
盾  
の  
ま  
じ  
に  
思  
え  
る  
の  
た

か  
・  
ニ  
う  
い  
う  
可  
能  
的  
知  
性  
の  
性  
格  
が  
け  
は  
人  
間

う	形	一	存	困	エ	に	要	不	は
新	相	て	も	る	あ	と	請	霊	神
し	と	面	の	の	ひ	え	が	魂	に
“	受	操	で	で	に	た	あ	は	よ
概	け	能	あ	あ	個	場	る	生	り
念	入	と	る	る	別	合	う	き	創
と	れ	独	か	。	的		。	て	造
た	る	立	か	か	形	可	こ	“	さ
て	機	た	か	か	相	能	の	る	れ
る	能	せ	る	る	に	的	よ	と	た
一	の		存	機	か	知	う	“	が
方	み	純	“	能	か	性	存	う	
	の	粋	か	は	か	の	存	宗	肉
個	可	料	う	そ	り	有	規	教	体
別	能	に	で	れ	る	る	定	的	の
的	的	非	あ	自	機		エ	立	減
形	知	質	る	体	能	質	可	場	後
相	性	料	。	質	の	料	能	か	で
に	と	的	二	料	処	性	的	う	も
か	“	で	う	的	理	性	知	の	原

「非対称性」  
①

か  
わ  
る  
機  
能  
と  
は  
個  
別  
的  
感  
覚  
の  
中  
に  
位

置  
せ  
し  
め  
下  
と  
推  
察  
し  
得  
る  
こ  
と  
あ  
る  
う  
と  
あ  
る  
こ  
と  
あ  
る  
か

故  
に  
は  
他  
の  
内  
的  
感  
覚  
と  
異  
な  
る  
こ  
と  
あ  
る  
か

の  
よ  
う  
な  
時  
異  
性  
を  
有  
し  
て  
は  
の  
こ  
と  
あ  
る  
か

と  
と  
と  
①  
の  
考  
察  
に  
特  
に  
よ  
う  
と  
②  
に  
よ  
ら  
ば  
考

遍  
的  
形  
相  
は  
個  
別  
的  
形  
相  
の  
存  
在  
か  
ら  
出  
来  
る  
の  
こ

は  
な  
く  
て  
能  
動  
的  
感  
知  
か  
ら  
の  
可  
能  
的  
知  
性  
の

流  
出  
(  
Emmanuèl  
)  
に  
よ  
り  
て  
生  
ま  
れ  
る  
こ  
と  
あ  
る  
か

個  
別  
的  
形  
相  
は  
も  
ち  
や  
個  
別  
性  
の  
原  
因  
に  
な  
る  
か  
質  
料  
性  
か  
ら  
の  
抽  
象  
化  
を  
完  
成  
し  
た  
時

こ  
の  
個  
別  
的  
形  
相  
は  
も  
ち  
や  
個  
別  
性  
の  
原  
因  
に  
な  
る  
か

能	こ	と	み	し	性	と	よ	相	料
動	あ	は	て	て	(	抽	う	と	と
的	る	い	"	も	ニ	象	こ	な	含
的	か	ぐ	る	こ	れ	し	あ	る	ま
真	み	ニ	あ	)	は	き	る	。	存
知	て	・	こ	あ	形	っ	。	と	い
は	み	シ	あ	中	相	た	そ	は	あ
神	よ	し	る	へ	の	時	う	い	こ
か	う	ナ	。		受		こ	ぐ	あ
さ	。	し	ま	普	け	能	は	ニ	る
流		に	ま	遍	入	動	な	。	か
出		於	づ	的	れ	的	く	シ	さ
し		て	か	形	あ	真	て	し	
た		こ	は	相	み	知		ナ	直
知		あ		か	え	か		し	さ
性		あ	能	流	そ	さ	か	し	に
こ		う	動	出	の	可	か	は	普
あ		は	的	可	機	能	質	考	遍
る		な	真	る	能	的	料	え	的
。		概	知	と	と	知	性	存	形
		念	知					い	

4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50

神は自己自身を「知る」(Intelligence) 存在である

リ  
ミ  
の  
自  
ら  
を  
知  
る  
と  
「  
う  
Self-Intelligent  
の  
契

機  
に  
よ  
り  
て  
知  
性  
を  
流  
出  
す  
と  
「  
う  
。  
二  
う  
「  
う

新  
「  
ラ  
ト  
ニ  
主  
義  
的  
存  
在  
と  
す  
之  
方  
は  
必  
然  
的  
に  
循  
え

し  
て  
神  
秘  
主  
義  
に  
向  
わ  
し  
め  
る  
要  
素  
と  
な  
る  
も  
の  
で

あ  
る  
が  
、  
と  
も  
あ  
れ  
、  
イ  
ヴ  
ニ  
、  
三  
一  
十  
一  
に  
よ  
れ

は  
、  
能  
動  
的  
意  
識  
は  
神  
的  
知  
性  
と  
一  
つ  
の  
知  
識

と  
「  
単  
一  
存  
在  
は  
「  
於  
て  
「  
有  
一  
て  
「  
る  
と  
「  
う  
。  
一  
切

の  
「  
単  
一  
的  
形  
相  
を  
或  
る  
一  
つ  
の  
単  
一  
存  
在  
絶  
對  
的  
形

相  
と  
「  
う  
任  
意  
に  
於  
て  
有  
一  
て  
「  
る  
と  
「  
う  
。

片断的な知識である世界の完全なものと、いふに任さるゝことは

なく、一切の知識が統一されたものであると、いふに任

さるゝ可くなく、かえつて個々の知識の統一である

可能なるもの、一なる知識である。それらは、いふ可

く、対する一ではなく、多量にあり、一である

。従つて、それれには、何さかの知識を授け

入れると、いふ可能性は全くなく、いふ。何故なら

それは、可く、自身に完全な知識を授け、つて、いふ

。完全な一なる単一の存在を、普遍的形相と



人間に於ける可能性の知性	知性作用の生じしめるのことで	知が可能な知的知性の中に素直	二の能動的意識の中にある	この形相は人間の知性の	(Hobbes. p. 216 ~ 217)	これが本来形相の存在する	このままのうちに	またやがては形相が	この二は
神の一者にとけ	あるが二のうちに	的形相と流出して	る。二の能動的意識	中か。しかも存くは	・三十一十一にあり	場所の存在する。	何故に	三にかゝるにけき	入れるべき形相と

る 能動的意識 知と

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

と アリス トテ

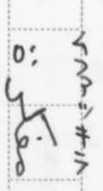
と アリス トテ

と アリス トテ

に		う	よ	響	<	ア	想		>
	ニ	の	う	ご	ア	ル	し	あ	ロ
(B)	う	で	は	あ	ヲ	・	に	う	ニ
と	ハ	あ	神	る	ビ	フ	が	ゆ	イ
検	う	ま	か	ニ	ヤ	ア		る	ニ
討	能	。	さ	と	の	ラ	ア	そ	ア
し	勸		流	か	響	イ	ル	の	ス
て	的		出	明	序	ビ	・	と	の
み	的		し	さ	著	イ	キ	く	ア
ま	知		に	か	達	・	ニ	く	ル
す	に		一	で	は	イ	ニ	る	ク
。	関		つ	あ	新	グ	く	知	サ
	す		の	る	ポ	ニ	イ	性	ニ
	る		知	と	テ	・	エ	"	ド
	予		性	ニ	ト	ニ	は	の	ロ
	備		で	る	ニ	主	い	と	ス
	知		あ	の	義	の	の	と	は
	識		る	ニ	の	と	し	神	ニ
	の		と	の	影	と		と	の
	下		ハ	の		結		一	

知性作用が生じるに必要なる要素は従って

① に保存された個別の形相

② 

③ 可能的知性

*vib. destination*  
の要素  
= vib.

④ 能動的意識の四個がある。さて二二

で我々はアル・フアラビの知性作用

にこの「マの」見解を及ぼす。従ってこれは

知性作用は、あたかも太陽の光が視覚の対象

と目に視るに必要と可能に可なり。と能動的

實知  
か  
い  
い  
わ  
は  
光  
と  
出  
し  
て  
記憶  
の中  
に  
貯  
え  
る

れ  
て  
い  
下  
個  
別  
的  
形  
相  
の  
質  
料  
性  
と  
除  
去  
し  
て  
も  
、

て  
て  
わ  
る  
の  
個  
別  
的  
形  
相  
と  
普  
通  
的  
形  
相  
に  
変  
之  
る

二  
と  
に  
お  
り  
て  
成  
り  
立  
つ  
の  
て  
あ  
る  
か  
く  
し  
て

普  
通  
的  
形  
相  
は  
能  
知  
的  
實  
知  
か  
ら  
流  
出  
す  
の  
て  
は

存  
く  
て  
個  
別  
的  
形  
相  
の  
質  
料  
性  
か  
能  
知  
的  
實  
知  
に

お  
り  
て  
除  
去  
す  
に  
時  
に  
個  
別  
的  
形  
相  
か  
直

に  
普  
通  
的  
形  
相  
に  
存  
す  
と  
い  
う  
。  
(  
جوان  
..

THE FACULTY OF  
Dawid 1959.  
مسألة اللسان العربي  
1952  
).  
結  
は  
可  
能  
的  
知  
性  
と  
イ

少  
二  
三  
一  
十  
一  
と  
は  
返  
に  
質  
料  
的  
存  
も  
の  
て  
あ

50260

二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
〃	相	料	抽	的	レ	相	か	〃	三	と
。	レ	性	象	形	一	は	質	七	と	考
三	と	と	し	相	の	非	料	は	え	え
一	受	と		の	知	質	的		に	た
ア	け	抽	質	み	性	料	の	個	別	の
又	入	象	料	互	作	的	あ	別	の	形
	也	さ	性	互	用	の	る	の	形	相
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
の	と	に	と	可	講	あ	の	相	と	ア
す	〃	の	〃	能	造	る	と	と	可	ル
に	う	的	れ	的	は	に	ハ	能	能	の
抽	型	形	に	知	能	ハ	シ	的	知	ア
象	と	相	に	性	動	シ	ア	知	性	ラ
さ	と	（	の	の	的	ル	ル	の	の	一
れ	シ	今	知	質	的			か	〃	レ
に	ガ	ア	性	料	的			普	遍	一
知	子	普	か	性	は			的	の	に
性	と	通		と	個			形	も	於
と	得	的	質	も	別					
	な	形								

形相とは全く一つの形式に存するといふ。(Thom)

(p.53)。このようにして彼にあっては現実的知性

とはそれがか受けて入れられていふ普遍的形相を

のてあると。いふことは従って二二二二二

の目的な力をいふ。またいふのは全く能動的意識

の目であり。人間知性は質料的に存するのと

このようにして二二二二二能動的意識の働きを

の目であま。即ちそのイグニエンスに於

ける要素として述べられては

1. 2. 3. ① ② ③ とはとも

に資料的なるものとして、  
④の働きとまつのみで

ある。ニ、  
ハ、  
ア、  
レ、  
ビ、  
の、  
観、  
念、  
に

於ては、  
当然、  
知性作用は人間、  
の、  
知、  
念、  
と

あり、  
力、  
に、  
か、  
か、  
わ、  
り、  
存、  
く、  
全、  
く、  
一、  
方、  
的、  
に、  
能

動的、  
意識、  
の、  
側、  
か、  
ら、  
生、  
ず、  
る、  
と、  
い、  
う、  
難、  
点、  
が、  
生、  
ず、

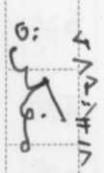
る、  
で、  
あ、  
る、  
う、  
。、  
イ、  
ヴ、  
ニ、  
。、  
三、  
一、  
十、  
一、  
に、  
あ、  
っ、  
て、  
は、

人間、  
の、  
知、  
る、  
う、  
と、  
可、  
る、  
努力は、  
能、  
動、  
的、  
意、  
識、  
知、  
か、  
る、  
の、

流出、  
と、  
準備、  
を、  
せ、  
る、  
も、  
の、  
と、  
一、  
て、  
。、  
存、  
る、  
概

念、  
で、  
説明、  
さ、  
れ、  
る、  
の、  
で、  
あ、  
る、  
。、  
そ、  
う、  
い、  
う、  
質、  
料、  
側、  
か

る、  
の、  
準備、  
に、  
対、  
応、  
し、  
て、  
。、  
可、  
能、  
的、  
知、  
性、  
は、  
非、  
質、  
料、  
的、





存  
た  
a  
と  
1  
て  
能  
動  
的  
覺  
知  
か  
る  
普  
遍  
的  
形  
相  
か  
流

出  
す  
る  
場  
と  
1  
て  
と  
ら  
え  
る  
れ  
る  
。  
ア  
ル  
。  
ア  
ア  
ア

1  
に  
の  
知  
性  
と  
形  
相  
と  
か  
同  
一  
の  
か  
の  
に  
は  
る

と  
1  
う  
観  
者  
と  
イ  
ヴ  
ニ  
。  
三  
1  
ナ  
1  
は  
次  
の  
よ  
う  
に  
存

理  
由  
で  
し  
り  
そ  
け  
る  
。  
即  
ち  
。

1  
も  
し  
知  
性  
か  
形  
相  
に  
存  
る  
て  
1  
ま  
る  
か  
の  
と

可  
る  
な  
ら  
ば  
。  
1  
ん  
能  
動  
的  
覺  
知  
か  
ら  
の

1  
て  
1  
ま  
る  
。  
後  
で  
は  
人  
間  
に  
は  
も  
は  
や

知  
性  
か  
ら  
な  
ら  
ば  
。  
と  
に  
存  
る  
。  
そ  
1  
て  
次  
に  
能

徹  
的  
覺  
知  
か  
ら  
の  
時  
に  
は  
と  
う  
な  
る  
の  
か  
。

كتاب الإنشائي والتنقيحات

P. 128



2

知性が形相に在る者を知る

の普通の形相はエのδに在るを知る

丸者のか。 ( كتاب الإنشائي P. 128 )

アム . . . フアライエニあるても思考は

可能的 知性が普通の形相を受ける入れる

δ . . . 成り立ち。 . . . 普通の形相は可能的

知性が受ける入れず時人間は一つのものに

ε ~~者~~ ~~は~~ . . . ( 観想 ) . . . が一人

間 . . . 常に同じ . . . とε者 ~~は~~ . . . わけて . . . 返る . . .

一	ニ	の	的	と	も	性	け	相	。
つ	一	形	形	差	の	か	入	が	他
の	十	相	相	え	に	受	入	入	の
ニ	一	が	が	て	存	け	れ	れ	ニ
と	は	受	受	ハ	つ	入	れ	か	と
の	反	け	け	合	て	れ	ぬ	わ	と
子	駁	入	入	け	一	了	ほ	つ	観
と	一	れ	れ	れ	ま	れ	存	て	想
常	て	る	る	ほ	う	下	る	ニ	す
に	ハ	ハ	ハ	な	存	一	ハ	の	る
観	る	ニ	ニ	る	る	つ	ハ	可	時
想	わ	と	余	ず	人	の	。	能	に
す	け	に	地	。	は	普	も	的	は
る	で	な	が	も	常	遍	レ	知	他
ニ	あ	る	な	は	に	的	ニ	性	の
と	る	と	ハ	や	同	形	の	に	普
ほ	。	イ	か	他	い	相	可	よ	遍
不		少	ら	の	ニ	と	能	つ	的
可		ニ	他	普	と	い	的	て	形
		。		遍			知	受	

能  
で  
あ  
る  
と  
イ  
ヴ  
ン  
・  
三  
十  
一  
は  
考  
え  
て  
は  
い  
な

〃  
。 依  
は  
る  
の  
よ  
う  
な  
任  
方  
と  
能  
動  
的  
意  
知  
の  
鏡  
像

に  
於  
て  
は  
認  
め  
る  
の  
で  
あ  
る  
。 だ  
か  
ら  
人  
間  
の  
知  
性  
は

そ  
の  
よ  
う  
な  
任  
方  
で  
観  
想  
す  
る  
の  
で  
は  
な  
い  
。 〃  
〃

の  
準  
備  
に  
よ  
っ  
て  
一  
つ  
の  
普  
遍  
的  
形  
相  
の  
流  
出  
が  
行

な  
ら  
れ  
可  
能  
的  
知  
性  
は  
〃  
わ  
ら  
ば  
鏡  
の  
よ  
う  
な  
に  
な  
れ

と  
写  
し  
だ  
し  
て  
一  
つ  
の  
鏡  
像  
が  
成  
立  
す  
る  
。 〃  
〃

た  
め  
で  
〃  
〃  
〃  
が  
準  
備  
す  
る  
と  
鏡  
に  
写  
し  
出  
さ  
れ

た  
ぞ  
の  
形  
相  
が  
去  
り  
新  
し  
い  
形  
相  
が  
流  
出  
さ  
れ  
て

可  
能  
的  
知  
性  
が  
な  
れ  
ば  
写  
し  
だ  
し  
て  
新  
た  
に

と	て	能	は	豊	の	能	ど	・	〃
全	そ	的	な	存	現	的	す	三	観
く	れ	知	く	っ	実	知	に	一	想
同	は	性		反	的	性	現	十	か
じ		の	形	新	知	に	に	一	行
も	知	位	相	し	性	他	形	に	存
の	性	置	が	〃	の	な	相	於	わ
て	作	に	立	存	ど	す	と	〃	れ
あ	用	か	す	在	う	な	う	て	る
る	が	之	ま	論	に	〃	>		の
う	あ	る	ゝ	的		。	一	現	こ
か	=	の	て	地	可	ア	て	実	あ
。	る	こ	一	位	能	ル	〃	的	る
あ	前	あ	ま	と	的	。	る	知	。
ら	の	る	う	有	知	ア	た	性	徒
は	可	。	と	り	性	ア	能	と	っ
=	能	下	又	る	と	ラ	に	は	て
=	的	が	元	も	は	一	あ		イ
て	知	果	の	の	全	ビ	る	鏡	ジ
。	性	し	可	こ	く	一	可	の	二

能力とその存在は知性 ↓ (

アル・アッラ・エルマシカ  
القوة العقلية  
Intellectus

in. *habitu*) とはいく概念を得る。なお、今までの

ハに可能的知性と現実的知性は、初めに挙げ

に分類表で、それら①、②、③の知性

とある。

附註 (2)

(=)

能力とその存在の知識

アルキメデス・エウクレイデス  
Intellectus

Intellectus

in Habitu )

アルキメデス・エウクレイデス  
Intellectus

( Intellectus Acceptus )

及こ直接的知識

前節のべたこととく知性作用は

個別の形相と抽象化可能とは前提として

能力的の真知かその可能的知性へ普遍的形相が流

出し可能な知的知性かそれを受け入れられて現実的

知性と存在の一致とにありたりつ。別の

と観想する時、別の普通の形相が受けとられ

なければならぬ。人間の知性は一度に一

つの形相のみしか受け入れらるゝと出まらぬ。

.....  
المقول الاضافى والامضى والاملا منى .....  
.....

.....  
منهاك الاضافات والاملا منى .....  
.....  
観

想する時、その形相は知性と離れなければならぬ。

その存は知性と離れたいの形相は一体ごとくに

行くか。イヴニ・ナハハ知性的記憶は

如何に可能であるか。示した。

さて彼によれば、二の普通の形相は能動的である。



知  
ハ  
ト  
帰  
ヲ  
テ  
ゆ  
ク  
ト  
ハ  
ス  
。  
（  
C. 2. 3. 4  
）  
ホ  
六  
章

Pr. 130 210  
實際  
形  
相  
ハ  
知  
性  
の

中  
に  
と  
と  
ま  
り  
続  
け  
る  
こ  
と  
ハ  
出  
来  
な  
い  
（  
こ  
の  
場

合  
は  
ズ  
れ  
の  
チ  
ト  
観  
想  
し  
続  
け  
る  
こ  
と  
に  
な  
る  
）  
。

内  
的  
感  
覚  
に  
は  
二  
つ  
の  
保  
存  
機  
関  
。  
C. 2. 3. 4  
と

と  
が  
あ  
る  
が  
前  
者  
ハ  
質  
料  
性  
と  
も  
存  
つ  
て  
個  
別

的  
形  
相  
後  
者  
ハ  
C. 2. 3. 4  
保  
存  
さ  
れ  
る  
こ  
と  
に  
な  
る

あ  
る  
。後  
者  
は  
普  
通  
的  
形  
相  
ハ  
そ  
れ  
に  
は  
保  
存  
さ

れ  
る  
。故  
に  
普  
通  
的  
形  
相  
ハ  
能  
動  
的  
感  
覚  
の  
存  
在  
カ

か  
。或  
ハ  
知  
性  
の  
存  
在  
カ  
に  
し  
カ  
存  
在  
可  
き  
こ  
と  
ハ

る	は	。	て		々	い	い	る	出
形	我	ニ	受	に	の	の	か	か	来
相	々	の	け	に	知	の	さ	さ	る
を	の	事	入	に	識	で	。	。	。
観	靈	実	れ	に	と	あ	あ	。	。
想	魂	に	こ	に	良	ま	ま	。	。
一	三	対	れ	に	懐	。	。	。	。
よ	が	す	た	に	一	し	。	。	。
う	か	る	形	と	と	か	。	。	。
と	。	イ	相	な	い	し	。	。	。
欲	て	ヴ	と	く	る	人	。	。	。
す	受	ニ	観		。	間	。	。	。
る	け	。	想	欲	。	の	。	。	。
時	入	三	出	す	即	知	。	。	。
は	れ	一	来	る	了	性	。	。	。
い	た	十	る	ま	あ	は	。	。	。
つ	ニ	一	の	ま	う	実	。	。	。
で	と	の	で	ま	た	際	。	。	。
も	の	の	あ	に	め	に	。	。	。
	あ	明	る	か	て	。	。	。	。
				。		個	。	。	。

靈魂は自身と能動の意識と再び結ぶべき

1. 前と同様に能動の意識がその形相

が流出される。その程度が重要な

と、その傾向が、その程度が重要な

し、その傾向が、その程度が重要な

その傾向が、その程度が重要な

その傾向が、その程度が重要な

Intellectus in habitus と呼ぶべき

この説明はあまり明白でない

も	可	形	抽	料	討	れ	<	と	。
は	能	相	象	性	み	て	二	と	ひ
や	的	の	化	と	に	い	と	る	と
と	存	間	可	滞	う	な	か	時	に
の	在	に	る	心	と	“	か	。	ひ
中	常	見	時	に	う	か	う	何	観
に	遍	出	。	個	ら	う	来	故	想
は	的	し	普	别	あ	る	る	に	さ
存	形	れ	遍	的	う	あ	た	靈	れ
在	相	る	的	形	う	る	う	魂	に
す	は	の	形	相	か	。	う	は	形
る	實	こ	相	に	。	以下	か	能	相
=	料	あ	か	作	即	の	。	動	と
と	性	る	可	用	了	の	理	的	再
か	と	。	能	し	。	よ	由	的	ひ
出	た	≧	的	て	。	う	か	的	観
来	存	1	に	。	。	に	。	知	想
	“	て	個	。	。	護	。	と	し
	か	そ	别	れ	。	明	示	結	よ
	う	の	的	と	。	と	さ	ひ	う



が  
可  
能  
的  
知  
性  
の  
中  
へ  
得  
入  
可  
し  
。可  
し  
と  
可  
し

に  
対  
応  
可  
し  
現  
実  
的  
存  
在  
の  
形  
相  
が  
能  
動  
的  
意  
知

か  
ら  
可  
能  
的  
知  
性  
の  
中  
へ  
流  
出  
可  
し  
。可  
し

1  
と  
人  
間  
の  
形  
相  
の  
観  
想  
と  
や  
め  
る  
時  
現

実  
的  
意  
識  
の  
形  
相  
は  
能  
動  
的  
意  
知  
と  
帰  
つ  
て  
ゆ  
く

が  
可  
能  
的  
の  
形  
相  
は  
可  
能

的  
知  
性  
の  
存  
在  
に  
と  
よ  
び  
。可  
し  
は  
現  
実  
的  
の  
可  
し

存  
在  
か  
ら  
し  
て  
残  
り  
得  
る  
の  
可  
し  
。可  
し

可  
能  
的  
知  
性  
の  
中  
へ  
得  
入  
可  
し  
と  
可  
能  
的  
知  
性  
の  
中  
へ  
流  
出  
可  
し  
と  
は  
同  
じ  
事  
物  
の  
二  
面  
性  
を  
示  
し  
て  
い  
る  
。可  
し

か  
ら  
の  
こ  
と  
は  
可  
能  
的  
の  
普  
遍  
的  
の  
形  
相  
を  
も  
つ  
て  
下  
可  
能

的  
知  
性  
は  
こ  
の  
可  
能  
的  
の  
普  
遍  
的  
の  
形  
相  
に  
関  
可  
る  
限

リ  
も  
の  
の  
に  
下  
よ  
る  
こ  
と  
を  
含  
可  
る

時  
に  
こ  
の  
に  
対  
応  
可  
る  
理  
実  
的  
の  
普  
遍  
的  
の  
形  
相  
の  
流  
出

と  
能  
動  
的  
の  
意  
知  
か  
ら  
の  
お  
お  
ぐ  
こ  
と  
が  
出  
来  
る  
こ  
と  
の

の  
こ  
の  
可  
能  
的  
の  
普  
遍  
的  
の  
知  
性  
を  
も  
つ  
て  
こ  
の  
知  
性

と  
能  
力  
を  
も  
つ  
て  
下  
知  
性  
を  
も  
つ  
て  
能  
力  
を  
も  
つ  
て

下  
知  
性  
は  
本  
義  
の  
意  
味  
で  
可  
能  
的  
の  
知  
性  
を  
も  
つ

ま  
り  
理  
に  
形  
相  
を  
含  
可  
る  
入  
ら  
ず  
も  
つ  
て  
こ  
の  
に  
関

と  
含  
可  
る  
こ  
と  
は  
理  
に  
於  
て  
も  
つ  
て  
こ  
の  
に  
関  
可  
る

るが、本来の「み」の「可能な」知的性質とは「の」

に「なき」と「果」存する「の」で「ある」。「能力」を「そ」な「た」知

性「は」**口**の「夕」イ「フ」に「属」する。

以上「の」で「存」説明と「討」みる「二」は「可能」であ

る「う」。

しかし「存」が「う」イ「ウ」ニ「三」一「ナ」一「の」能力を

「分」之「た」知「性」存する「概念」は「認」憶「を」の「た」を「解

明「す」る「た」ゆ「に」は「そ」れ「の」み「で」は「明」る「か」に「不」老

命「で」あ「る」。「何」故「な」う「は」「そ」の「の」「力」カネマツカ「に」も

「能」動「的」意「知」と「結」む「つ」き「か」く「て」得

正	九	一	=	的	人	二	想	み	子
よ	子	切	と	形	間	と	一	で	九
さ	時	の	に	相	リ	に	正	は	正
可		可	存	が	は	と	と		形
	人	能	子	可	認	か	あ	そ	相
つ	間	的	が	能	憶	あ	る	れ	が
ま	は	普		的	に	る	と	と	再
り	も	通	三	知	は	存	“	観	心
質	は	的	九	性	存	さ	う	想	得
料	や	形	が	の	に	存	“	可	る
的	如	相	換	中	に	“	う	る	九
世	何	が	限	に	に	か	意	際	に
界	存	可	に	達	二	さ	識	に	に
と	る	能	一	一	と	で	エ		一
は	時	的	正	に	に	あ	知	二	で
関	も	知	正	ふ	可	る	性	九	も
係		性	時	之	能	る	か	は	
存	o.	に		て	的		も	以	そ
く	o.	合	即	ゆ	普		正	前	れ
	に	ま	了	く	通		存	観	の



能動的意識知から現象的形相の流出であるから、

とが出来るからなる。これは極限に達した知識

性が現象に観想して、  
*アクト・オブ・インテリジェンス*  
*Actus Intellectus*

(Intellectus Absolutus) と呼ぶ。これは上にのぼる

からなる。その働きに於ては、何ら感覚に

ある。知性である。能動的意識知から

もの形相と一度に観想する。比較するところ

これは形相と同一と。観想する。③

タイプに属する。極限に達する。能力

力である。存在した。知性が現象に観想して、

相	回	9	能	。	て	相	。	③
エ	モ	て	動		ゆ	と	に	9
か	ハ	あ	的		く	能	属	夕
く	コ	ま	的		が	動	さ	イ
と	ト	か	的		。	的	せ	7°
く	ク	さ	的		=	知	る	に
可	コ	間	知		=	知	=	属
る	に	題	は		に	か	と	可
9		は	の		次	に	か	る
て	一	な	の		9	人	出	。
あ	回	ハ	形		あ	間	来	能
る	す	か	相		さ	は	る	動
。	コ	。	と		存	。	。	的
に	個	人	一		問	次	的	的
か	々	間	度		題	々	知	知
=	の	は	に		か	と	は	④
れ	普	。	観		出	普	。	。
ら	遍	観	想		て	遍	の	夕
の	的	に	可		く	的	イ	イ
普	形	何	る		ら	形		

至	一	も	の	支	諸	終	信	は	通
し	石	の	の	え	知	一	知	力	的
る	知	は	の	る	識	性	識	十	諸
終	識		に	も	が	の	が	ヲ	形
験	は	イ		の	終	な	あ	の	相
を	経	ヴ	個	が	一	い	子	一	の
可	験	ニ	々	な	づ	。	。	ニ	間
能	に	。	の	く	け	故	ニ	れ	に
に	よ	ニ	形	て	す	に	れ	。	は
可	う	一	相	は	れ	そ	。	。	何
る	て	十	に	終		の	の	の	の
も	得	一	内	は	そ	よ	形	字	関
の	る	に	的	な	ニ	う	相	真	連
と	れ	よ	終	り	に	に	間	の	性
し	る	れ	一	た	内	一	に	よ	も
て	の	は	性	た	的	て	は	う	な
	て		と	な	連	得	何	に	い
	は		支	い	関	る	う	不	。
終	な	ニ	え	。	性	れ	内	連	そ
験	く	の	る	そ	と	に	的	続	れ
		車							



第一の知識は、先に述べられた「虚空」の中の人

間の例に、よって示されたものの「自覚」としての知

識と異なる点。それは、あるゆる経験を経て一

的に把握する原理として自己（自己）の自己に對する

自覚 (Self-Intuition) なるのである。

さて、自己感覺なるものは、Self-Intuition

は、その「実」の展開を、さしはかり、み

み、実、心。

① アリヌトテリスはすでに前章で述べ

たように、諸感覚にそれぞれ自己意識がある

とき、たゞ、つまり感覚がその対象と感

覚は対象と同時に自己の行方と感

と考へたのである (De Anima II, II, 425a) 従

て自己意識とその機能とあるように、中

関存のし原理は、循にある、これは見出

た。わかばそのものの中核的原理と各

感覚はそれぞれ

同時に、それぞれ自己意識があるゆ

交通

の  
も  
の  
で  
あ  
る  
か  
し  
し  
て

ら

の  
機  
能  
で  
あ  
る  
か  
も  
知  
れ

②

そ  
の  
事  
実  
ア  
ブ  
ロ  
テ

ク  
サ  
ニ  
ド  
ロ  
ス  
は  
自  
己  
交  
渉  
に

で  
あ  
る  
こ  
と  
を  
み  
て  
い  
る  
の  
で  
あ  
る

③

ラ  
ポ  
サ  
コ  
ス  
の  
ス  
ト  
ラ  
ト

テ  
レ  
ス  
の  
場合  
の  
意  
義  
に

一  
般  
に  
は  
あ  
る  
機  
能  
を  
示  
す

し  
の  
二  
九  
に  
は  
コ  
レ  
ク  
レ  
イ  
シ  
ョ  
ン  
の  
意  
義

そ  
の  
は  
コ  
レ  
ク  
レ  
イ  
シ  
ョ  
ン  
の  
意  
義

こ  
の  
機  
能  
を  
示  
す

イ  
ニ  
ア  
ス  
の  
ア  
ル

コ  
レ  
ク  
レ  
イ  
シ  
ョ  
ン  
の  
機  
能

ニ  
は  
ア  
リ  
ス  
ト

人  
間  
の  
経  
験  
を  
経

得  
る  
こ  
と  
を  
見  
出

新  
た  
な  
見  
出

あり。 (Zelle: Philosophie von Aristoteles 10. 11. 12) 徳に

よれば。 感覚は自己意識をもたす。 その感覚

作用と意識する。 は *φρονετικόν* である。 徳

が *φρονετικόν* 自身は自己意識を有し存し。 徳は

徳にあり。 徳は *φρονετικόν* である。 徳は自己意識する自身

(Zelle) と。 明確な概念を見出す。 出来

存。

④ 経験と統一する。 自己意識する。 靈魂

は。 概念と外々。 自己意識する。 靈魂

て見出す。 出来。 自己意識する。 靈魂





と  
1  
下。  
従  
て  
人間  
に  
あ  
る  
は  
人間  
知  
性  
の

最  
も  
基本  
的  
存  
在  
手  
と  
1  
と  
自  
己  
に  
対  
する  
対象  
の

形  
相  
し  
と  
可  
能  
な  
と  
な  
く  
自  
己  
に  
つ  
いて  
素  
識  
し

得  
る  
と  
可  
能  
な  
で  
あ  
る  
。  
それ  
が  
イ  
ヴ  
ン  
・  
ミ  
ー  
ナ

1  
の  
序  
が  
可  
能  
な  
あ  
る  
下  
の  
要  
請  
で  
あ  
る  
下  
。

我  
々  
は  
以  
上  
に  
於  
いて  
可  
能  
的  
知  
性  
現  
実  
的

知  
性  
能  
力  
と  
そ  
の  
下  
知  
性  
の  
四  
個

ア  
ク  
ル  
・  
カ  
ン  
ト  
の  
知  
性  
の  
四  
個  
の  
論  
議  
の  
要  
請  
に  
あ  
る  
下  
。

の  
知  
性  
が  
そ  
の  
下  
の  
知  
性  
に  
属  
す  
る  
か  
ら  
知

り  
各  
々  
が  
こ  
の  
よ  
う  
な  
相  
互  
関  
係  
を  
有  
し  
て  
い  
る

かゝ知つた。イガニ・ニ・一十・一が、の知性論

と通じて論証し、そのとし、た必要とするに

如何にして質料的世界の知識が可能であるか

が、あつた。と、知る。か、か、か、質料的世界

界への認識は、階にある。それは同時に形相的世界

界、能動的意識への認識に迫る。と、でもあつ

た。何故なら、質料世界に關する知識は、形相

的世界から流出する。と、あつた。か、つた。又

人間の一元的知識の可能な形に、或る車

一、知識が必要である。と、知る。た。し、か、し

我々には何かある車一存知識と能動的寛知か如

何に關係しては「あるか」と分析検討するに於ける

「イダニ・三十一自身」の「九に關す

る論述」も「ある」である。

最後に我々は「一」の未解決の問題を指す

「この論文を明した」と思ふ。それは彼の

後期作品である  
كتاب المقالات والفتاوى  
著者: محمد باقر الصدر

「ある」

② 人間「靈魂」の「一」機關である。飛躍に於ける

「直観的存在」の「能動的寛知」

と 結 び 込 む 一 切 の 知 識 と 同 時 に 把 握 可

る 二 三 の 知 性 ( Ibidem. Pp. 176-207, 218 )

③ 靈 魂 の 一 部 に は 各 人 間 の 心 智 的 人 間 の 心 智 的 人 間

於 て 何 ら け ば 知 性 に あり 人 間 と

し て 神 的 存 在 に 向 け ら れ ば 心 智 的 人 間 と

の 知 性 に あり 一 切 の 知 識 と 同 時 に 把 握

す べ き 知 性 ( Ibidem. Pp. 155, 210 )

α と β の 知 性 の 問 題 に あり ④ に 於 て

は 靈 魂 の 一 機 関 と し て あり ③ に 於 て

は 明 確 に 一 機 関 と し て あり ③ に 於 て 可 能 的

知性  
でも  
合理的  
知性  
でも  
能力  
を  
分  
之  
下  
知性

でも  
も  
には  
知性  
は  
存在  
に  
要  
存  
す  
る  
問題

でも  
ある  
(a)  
と  
(b)  
の  
知性  
は  
存在  
に  
要  
存  
す  
る  
問題

ある  
ように  
思  
え  
る  
か  
も  
あ  
れ  
か  
か  
る  
知性  
を

導入  
する  
に  
よ  
る  
イ  
ヴ  
ニ  
ニ  
一  
十  
一  
は

予言  
の  
存在  
か  
可能  
か  
ある  
に  
と  
論  
い  
ふ  
よ

と  
した  
の  
で  
あ  
る  
よ  
う  
に  
思  
わ  
れ  
る  
。  
二  
の  
よ  
う  
に

知性  
概念  
を  
我  
々  
が  
今  
ま  
で  
論  
い  
て  
き  
た  
知性

概念  
に  
体系的  
に  
接  
合  
す  
る  
に  
よ  
る  
無  
理  
で  
あ  
る

よ  
う  
に  
思  
え  
る  
か  
も  
あ  
れ  
は  
体  
の  
あ  
る  
ゆ  
り  
の  
階  
序  
的

付録の総合的理解の下で  
検討させねばならぬ  
反問題がある。

— 終 —